



リステラス星圏史略
古資料ファイル 4-3-3

『皇女戦記』
(地球から異世界へ)

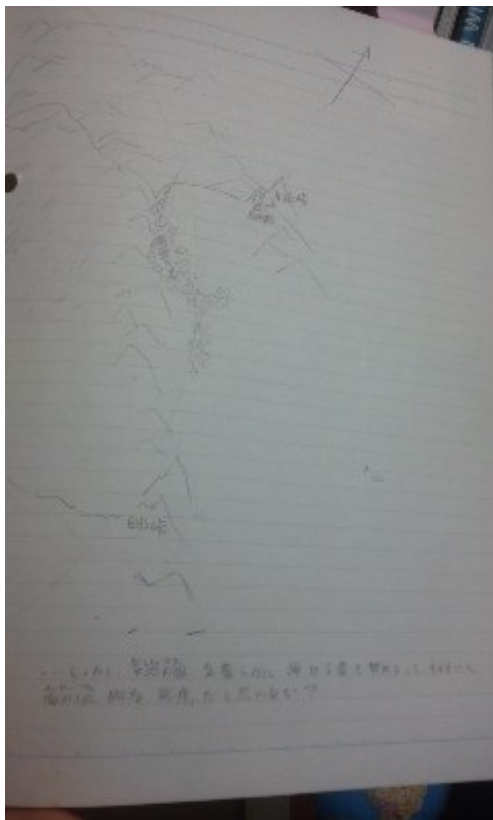
(発掘整理一旦完了)

霧樹里守 is 土岐真扉

縮尺メチャクチャ。大地の国（ダレムアス）地理図。 （たぶん中学）

縮尺メチャクチャ。大地の国（ダレムアス）地理図。 （たぶん中学）

2016年8月11日 リステラス星圏史略 （創作）



◎ 「記憶を取り戻し、わたしの国、わたし本来の生き方の上に還る事ができないのなら、ここで殺された方がましよ。」

◎ 偶発事故でまきこまれながら、新しい危険な旅に出るとなったら、あわててついていった雄輝と鋭。

◎ 大地（ダレムアス）は完全な並行世界で、地球と交わる接平面上、太陽系内から月の辺まで、ずっと陸地。（！？）

縮尺メチャクチャ。大地の国（ダレムアス）地理図。

...しかし、大地の国（ダレムアス）を書くのに、海から書き始めるって、ものすごく、海の球（ティカース）的な 発想だと思わない？

○ 大地が広がっているから、創世記時代の距離感は通用しない。

[『長寿人 - 超人 - 超寿人』 \(@中学2年?? 3月15日\)](#)

2007年2月15日 [連載 \(2周目・地球統一～ESPA\)](#)

3/14 まず、マーシャが、

いつ、

なぜ、

だれによって、

どこから、

どうやって、地球に来たかを決定すること！

3/15

それが決定するまでは、ダレムアスはおあづけ!!?

再び先じゃないサキの方へ?

何回くりかえしてるんだらうね? このいったりきたり.....

.....なぜか?.....次のページには、

[大地世界ダレムアスの初期の地図があります.....\(^_^;\)](#)

○ 大地が広がっているから、創世記時代の距離感は通用しない。

海 (魚)

火の山 (噴煙)

マドリアウィ神殿

始祖平原 (ハジメノハラ)

大地の背骨山脈

~~—ダレムアスの神々。~~

~~—ダレムアスの神は、~~

~~—守護神（まもりのかみ）と師導神（おしえのかみ）などにわかれ、~~

~~—母神であるマリアンドリムは命、他の主神5神は国人のために~~

~~—それぞれ水と木と石と—~~

・ルツィファー（ルシフェル）

トイフェルの別名。原意は、光を運ぶもの。

・サタン

ヘブライ語で地獄の王者。敵対者、悪い天使。

・火の精（火の王）は他ならぬトイフェル、サタン、又は

ルツィファーである。トイフェルは唯一の火の精で

Lord ~~—支配者、王者、領主、貴族、~~

~~—My Lord—閣下！~~

~~—the Lord of Lords—~~

Battle ~~—戦い、戦闘、会戦。—~~

(「記憶の旅」)

(「記憶の旅」)

2007年7月2日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

大地の国物語皇女戦記編I.

記憶の旅

序章——障害物競走

緑の黒髪という言葉があるが、今年12歳の美少女・真里砂（まりさ）の髪の色は、正真正銘まがいものなしの緑色だった。

それも、萌え出でる春の炎を思わせる、純粹で明るい森の緑なのだ。

その瞳すらも殆どそれと解らぬ程かすかに青緑色のかかった濃い色合いを帯びている。

象牙色の肌——これもまた日本人離れした。

年の割に背が高く、すらりと伸びた手足は、一見してほっそりと言うよりは華奢という言葉を連想させる。（それだけ効率良く筋肉が着いている証拠だと、彼女の主治医が保証した。）

そしてギリシア彫像よりははるかに雛人形に近く、それでいて西欧風の森の妖精族を想わしめるような、そんな容貌を彼女は備えていた。

自身の故郷では、有澄（ありずみ）真里砂は愛称で『森の木洩れ陽（マダ・リクルメス）』、若しくは単にマ・リシャとだけ呼ばれていた。

自分の生い立ちにまつわる事を彼女はそれしか知らない。

気がつけば、何処とも定かでない故郷（ふるさと）を遠く離れて森の奥に記憶を失って倒れており、行くあてもないままに発見者である有澄夫妻の養女になった。

それが六年前——真里砂六歳の時の事である。

真里砂は現在外交官である養父母の元を離れて、日本の、とある大森林の片隅にある世界的名門の寄宿制私立校《朝日ヶ森学園》にて小等部最後の一年を過ごしていた。

秋の事である。

× × ×

♪ポンポンポンーン！

「選手招集をします。“五〇〇〇m障害物競走に参加希望した男女。大至急正門脇に集合して下さい。繰り返します……”」

「あっ！大変！」

そろばんを放り出して真里砂は勢い良く立ち上がった。

時計はいつの間にか二時十分前を指している。集計係の忙がしさにとりまぎれて、真里砂はまだ

昼食を摂り損ねていたのだ。無論今更食べている暇は無い。

（朝もろくに食べられなかったのに——...）真里砂は慌てて机上を片づけようとして三度も筆箱をひっくり返し、イライラしながら正門脇に到着した時には「遅いぞ」と委員の小言を喰わなければならなかった。

障害物競走。

陸上部のエースで脚には自信があるとは言え、中等課の男子までもが同時に走る競技である。全国二位の記録の保持者としても、体格が大人に近づきつつある、走り込んでいる陸上部の先輩達が相手ではいささか心もと無かった。

（互格に走れるのかしら.....）

「いよっ！マーシャ!!」

ばん★ まるでインディアンのような黒い髪、黒い瞳。陽に焼けて浅黒く、中一にして身長百六十cmの体格を誇る真里砂の幼な慣じみ——雄輝が、彼女の背中を力まかせにぶったいた。

「.....ケフッ。少しくらい手加減したらどうなの」 相手が頭一つ分ばかり高かった所で真里砂が容謝する訳がない。

とは言えもう慣れっこになってしまっているのです、彼女もいたずらっぽく眉を上げてみせただけだった。

雄輝にデリカシーなどと言うものを理解させようと言ったって、それは無理と言うものだ。

「おまえ少し上がってるみたいだな。」——どういう風の吹きまわしだか兄貴風をふかし

（☆コクヨの400字詰め原稿にシャーペン手書き／清書級）

（※続き未発掘※）

2007年7月17日 [連載（2周目・大地世界物語）](#)

大地の国物語皇女戦記編Ⅰ “記憶の旅” ～連載第二回～

第一章 森の中で —— 1. ここは地球じゃない。

※ 本名 ※

「あ、痛（いた）。いたた.....あち☆」

罵声とも悲鳴ともつかない声を発しながら、真里砂はやっとの思いで立ち上がった。頭がひどく痛む。

「——寒い！」と思わず口に出してつぶやいた程、彼女の体は完全に冷え切っていた。気がつけば、どこでどうしたものだか薄手の体操着がすっかり濡れそぼって体にまとわりついている。

辺りの景色を見るに及んで、真里砂はしっかり腹をたててしまった。

木、木、木、————一面の樹。 うっそうと頭上に生ひ茂る森の樹々が、陽の光さえもさえぎって真里砂を取り囲んでいるのである。——なんてこと！」。

一旦はかんしゃくを爆発させようとした彼女も、怒鳴った声を事も無げに吸い込んでゆく森の静かさを悟って怖じけづいてしまった。

「一体.....何が起ったって言うの.....!？」

ここは、何処かしら——さしもの真里砂も除々に声が低くなった。実を言えば、彼女はしばらくの間、自分の身に起ったことを思い出せなかったのだ。それから、ようやく自分とはとんでもない冒険に巻き込まれたらしい、ということに思い当たった。

その時である。

真里砂の背後で木々の下枝をかきわけ押しのける音がして、

「お——っ!! いた、居た!!」

声と共に2人の少年達が姿を現わした。

「雄輝！鋭！.....どうして!?!」

(☆驚いている真里砂のシャーペン描きイラストあり。)



つかんで押した枝をそのままへし折って前に出ながら、雄輝は開いている方の手でバサバサの頭をかき上げた。

ただでさえ着るのを面倒がって伸ばしっぱなしだった黒髪が、小枝やらくもの巣やらでひどい有様だ。

「どうしてって……何が“どうして”だよ？」

「だって、だって——なんだってあなた達がいるのよ」

「決まってんだろ。おまえを追っかけて来たんだ。

……ふう！ あーあひでえ目に会った。」

(☆髪を掻き上げながら蜘蛛の巣だらけの藪から出て来る雄輝と、その後ろでげーっという顔をしながら蜘蛛の巣をくぐっている鋭のシャーペン描きのイラストあり。)



「つまり僕らもあの穴に飛び込んだんだ。

君（きみ）と違うのは自由意志だって点だけで」

これには真里砂もあきれかえった。

「なんですってェ!? 馬鹿な!

何が起ったのだから解っているの?

帰れないかも知れないのよ!」

真里砂は同時にひどく腹が立った。

自分は恐怖していたと言うのに、この

のほほんとした言い草はどうだろう!

と、雄輝の答えて曰く、

「面白そうじゃん」。

「おも☆」——ズル。

真里砂は絶句した。おおいにズッコけた。

なんて神経! これわたしより年上だなんて.....

「鋭! あなたもなの?!」

無論、そうだとでも言おうものなら

ひっぱたちてやろう——と完全に頭に来ている。

「いや.....僕は.....」返事に窮した鋭の方こそいい迷惑だった。

「僕はまずあの暗黒穴（ブラックホール）まがいの正体を突き止めてやろうと思ってたんだよ。それを雄輝が先に飛び込んだんでやむなく……さ」。

「そう——」と真里砂。「なら、まあ、あなたは許してあげるわ。——雄輝！」「あん？」ところが、真里砂が凄じい剣幕でまくしたてようとした時である。

「くしゃん！ くしゃん！」不意に鋭がくしゃみを始めた。

一旦は三回で止んだもので、真里砂が、「あら、3でほれられ、ね……」と言おうとした途端にまた「くしゃん！」

後はたて続けにくしゃんくしゃんくしゃんくしゃん……くしゃみの大安売りである。

そのうちに真里砂までが鼻をむずむずさせだしたので雄輝が笑いだした。しかし、

「わ、笑ってる場合じゃないわよ雄輝。くしゃん！ わたしもだけど、あなたたちの服だって濡れてるじゃないの。それに、そうでなくともここずい分寒いと思わない？」

それを聞いて初めて雄輝も少しばかり真面目な顔になった。

「確かにこりゃ12月頃の気温だよな……おい、鋭！ そこら辺に乾いた未ぎれにストーブかなんかないか？ 無けりゃ火炎放射器でもなんでもいいぞ！」

「ちえっ、なんでも茶化すんだから……」今度は鋭の方が恨めしげな声で言う。

それでもなんとかかんとか20分もすると小さな火の手が3人を暖め始めた。

もつとも、その頃にはくしゃみのしすぎで、鋭の横隔膜はしっかり痛くなってしまっていたが…
…「ちえっ！」

「腐るな腐るな。しかし“河童”でも風邪はひくんだなあ」と雄輝が妙な事に感心して見せるのに反論して、

「“コンピューター”は温度変化に弱いんだよ。雄輝こそよく平然としてるね。まあ、ナントカは風邪ひかないって言うからねえ。あ、僕はだれかさんと違って夏風邪はひかなかった。」

「抜かせ！」

自称“コンピューター”で“河童”の鋭が相手では、単細胞の雄輝は、はるかに分が悪い。

「お腹が空いたわね……」クスクス笑っていた真里砂がそうつぶやくと、辺りは急に静かになった。

不意に、あ、と鋭がかすかな驚きの声を上げた。「雪だ……」。

なる程、確かに白いものが散らつき始めていた。多分風向きが変わったのだろう。先程までわずかにさし込んでいた薄陽は姿を消して、代わりに灰色の厚くたれこめた雲が空を覆っている。

樹木の間で風から守られているのがせめてもの救いだ。

急に、雄輝が自分だけ羽織っていたジャージのジャンパーを脱いで、半袖短パンのまま左隣にうずくまっていた真里砂に着せかけた。

「あ、いいんだ。僕は？」 鋭が半畳入れると雄輝があきれ、

「おまえなあ一応男だろ」「あら女だからって特別扱いになんかしないでちょうだい！」 憤慨して鋭にジャージを渡そうとする真里砂の腕を素速く雄輝が引き戻した。「マーシャ。半袖だろ。」

いつになく有無を言わせぬ口調である。 それでも真里砂がぐずぐずしていると、「俺は妹に貸

してやったんだぞ。兄貴の言う事が聞けないのか?!」

.....「はい——兄上サマ.....」?。なんとなく気圧されたのを感じながらも、真里砂は茶目っぽく笑ってジャージを羽織った。

正直なところ、朝、昼（食）抜きプラス2000mの全力疾走の後では、この寒さはひどくこたえていたのだ。

真里砂は幼な慣じみの荒っぽい優しさに感謝した。湿ったジャージがなぜだかとても暖かった。

(☆ジャージを羽織って小さな焚き火にあたる、
おっぱ頭の真里砂のシャーペン描きのイラストあり)



「.....面白そうな冒険、と思ったんだがなあ.....」と、口先程には嘆いている様子も見せないで雄輝がぼやいた。

『 大地の国物語 皇女戦記編 』（@『太陽系』第三号連載分（下書き段階）＝高校1年。）

『 大地の国物語 皇女戦記編 』（@『太陽系』第三号連載分（下書き段階）＝高校1年。）

2007年7月12日 [連載（2周目・大地世界物語）](#)

大地の国物語 皇女戦記編

失なわれた記憶 記憶の旅

P1.

序章 —— 障害物競走

緑の黒髪、という言葉があるが、今年12歳の美少女・真里砂の髪は、正真正銘まがいものなしの緑色だった。

それも、後世地球の一部学生たちから『にせ緑』色と呼ばれる事になる人為的な緑とは異って、萌え出でる春の炎を思わせる純粋な森の明るい緑色だった。

その瞳すらも、ほとんどそれとわからない程にかすかに青緑色のかかった濃い色合いを帯びている。

象牙色の肌——これもまた日本人離れした。

年の割に背が高く、すらりと伸びた手足は、一見、ほっそり、というよりは華奢という言葉を連想させる。（それだけ効率良く筋肉がついている証拠だと、彼女の主治医が保障した。）

そしてギリシャ彫像よりははるかに雛人形に近く、さらには最も似通ったところで森の妖精といったに最も酷似した容貌を備えていた。

自身の故郷では、有澄（ありずみ）真里砂は愛称で、『森の木洩れ陽（マダ・リクルメス）』もしくはマ・リシャと呼ばれていた。

自分の生き立ちにまつわる事を彼女はそれしか知らない。

気がつけば故郷（ふるさと）を遠く離れて『丸い地の国（ティカース）』の森の奥に記憶を失って倒れており、行くあてとてないので、言葉を教え世話をしてくれた、子供のいない有澄夫妻の養女になった。

これが6年前——マーシャ（現在の真里砂の愛称）6歳の時の事である。

真里砂は現在（いま）、外交官である養父母のもとを離れて、日本の、とある大森林の片隅にある寄宿制の世界的名門私立校、朝日ヶ森学園にて小等部最後の一年を過ごしていた。

秋のことである。

P2.

×

×

×

ポンポンポン

「選手招集をします。5000m障害物競走“小等部上級～中等部低級”に参加希望の男女、大至急正門脇に集合して下さい。繰り返します。……」

「あっ！いけない！」

そろばんを放り出して真里砂は勢い良く立ち上がった。

時計は2時10分前を指している。集計係の仕事の忙しさにとりまぎれて、真里砂はまだ昼食を摂り損ねていたのだ。無論、もう食べている暇などない。

朝だってろくに食べてやしないのに——。真里砂は慌てて机を片づけようとして3度も筆箱をひっくり返し、イライラしながら正門脇へ到着した時には「遅いぞ」と委員の小言を喰わなければならなかった。

障害物競走。それは陸上部のエースで脚には自信があるとは言え、——特に長距離は最も得手とする種目であったが——中等部課2年の“男子”までもが同時に走る競技である。全国2位の記録の保持者としても、体格が大人に近づきつつある、走り込んでいる陸上部の先輩達が相手では……いささか心もとなかった。互格に走れるのかしら……。

「いよっ！ マーシャ!!」

ばん★ インディアンのようにつややかで風になびいている黒い髪、黒い瞳、陽に焼けて浅黒く、中二にして身長170160cmの体格を誇る——真里砂だって155cm/145はあるのだが——そして午前部の最終の中・高等部の騎馬戦において、一人で二十騎を引き倒し、並いる上級生たちを押しつけて、最多制覇記録を打ちたたてた闘争本能の権化とも言うべき古強者、雄輝が、真里砂の背中を力まかせにぶったいた。

「……ケフッ。少しは手加減したらどうなの」相手が頭一つ分ばかり高かったところで真里砂が容しやるわけがない。とはいえ、もうなれっこになってしまっているのです、真里砂はいたずらっぽく眉を上げてみせた。

雄輝にデリカシーなんてものを理解させようたって、そりゃ無理と言うものだ。

P3.

「おまえ少しあがってるみたいだな」

おやおや。6年越しの幼な慣じみはどういう吹きまわしだかわけだか兄貴風を吹かしたがつている様子で、開いている方の左手で真里砂の頭を気やすくポンポンたたく。

右手は（午前中いっぱい暴れまくった後なので午後からは委員会を手伝わねばならず）ピストルと薬きょうの入った箱でふさがっていた——雄輝はスタート係なのだ。

「ハチマキずれるでしょ」

真里砂はぱんと雄輝の手を払いのけた。雄輝も慌てて手をひっこめる。

真里砂のみごとな黒髪がかつらとばれたら大事（おおごと）だ。緑色の髪の地球人間だなんて

。

今の所、学園内で真里砂の秘密を知っているのは、真里砂本人を除いてわずかに2人だけなのである。

そしてその残りの一人、真里砂のクラスへ1ヶ月前に転入して来たばかりの鋭は、広い校庭の反対端で、上級生の群れに見え隠れしながら競技用の障害物の最終点検をやっていた。背は高くないので探しにくいのだが、混血児（ハーフ）らしい色の白さと明るい色合いの髪が結好良い目印になるのである。

「ところでおい、おまえ障害コース見てまわる余裕あったのか？」

名物障害物マラソンの障害物は、科学部建築クラブ等の面々が毎年毎年技術の粋と意地の悪さを存分に発揮して毎年毎年違った新しいコースをこしらえあげる。それは大会体育祭当日朝のうちに組み立てられるまでは、極秘、が建て前だったから、障害物競争に出場しようと思っている人間は空き時間を利用して確認してくるのが常だった。ところが真里砂は3つの委員会とクラブを掛け持ちで、食事すら朝昼満足に摂っていないのである。

「雄輝だって知ってるでしょ、そんな暇あるわけじゃない」
真里砂は茶目っ気たっぷりに（そう見えるように見せようと半ば意識しつつ、）小さく肩をすくめた。

でも、大丈夫かしら。本当に勝てるかしら。速さの点では後半でなんとか喰らいついて行けるはずだわ、長距離は体力の問題だから。5000mなんて軽いものよ……。

P4.

真里砂が実は優勝候補の一人であることは無論周囲の良く知るところだった。

殊に真里砂の後背——陸上部や演劇部——の女の子達は、熱心にその事を願っている。憧れの先輩を応援している。

真里砂はそんな風に周囲から期待を寄せられるのは嫌いではなかった。むしろその期待を裏切ってしまうような事の方が不慣れである。

障害物は——これはもう機転と判断力の問題だわ。そしてそれならもちろん心配な……

……あらっ!?

してみると不安を感じる理由などないではないか——真里砂はいぶかった。彼女は自分がなんのいわれもなく不安になるような人間ではない事を良く知っていたのだ。

では、わたしが心を騒がせている原因は、どこか他にある。

断定してみて真里砂はほくそ笑んだ。思考法が段々、向こうで作業中の清峰鋭に似て来てしまったようだ。

鋭の異名をコンピューターと言う。IQ260の天才少年と人は呼ぶ。

「おーい！」 呼ばれて雄輝はスタート係の仕事をしに走って行った。

真里砂はどうせもうしばらく暇なのだからと意識を集中させて自分の不安の原因を突き止めようと試た。——いや、“不安”と言うのは的当でない。それは何か予兆に似ていた。春の始めに猫柳の

若枝が、今にもはじけそうではじけない新芽のむずがゆさにおののいている——そんな感じだった。

障害物の最終点検が終了したらしい。鋭が何事かを伝達しに審判・スタート係のたむろしている場所へ走って行った。各走者一斉に身構える。雄輝の拳銃が天高く秋の空に響き……真里砂は先頭を切って走り出した。

× × ×

実にとんでもないコースだった。実に、実に。
きっとこれは鋭の立案によるものに違いないわ、と、自分自身も予測のつかない難コースに

P5.

辟易しながらも真里砂は十分楽しんでそう考えた。

図体がでかいばかりで総身に知恵の回り兼ねている連中は、早くも最初の網くぐり、尾瀬沼（1）辺りでひっかかって、ゴキブリホイホイよろしくジタバタやっている。下見をしていなかった真里砂は、置いてある器具をどのようにしてどうやって通ったら良いのかわからなくていちいち立て札を見なければならなかったの、最初はかなりきつかった。が、コースの設計者の方も楽しんでしまっているから、半分も行く頃には落伍者も半分、4分の3行程行けば走者は4分の1なのである。真里砂はどの障害も気前良く追い越した。（無論人間も）

前に残っているのはもう中等課の2・3人だけ。ものすごい応援合戦が繰り広げられている事が、夢中で走っている真里砂にも良くわかった。

「フレー！フレー！真——里——砂!!」

「フレー！フレー！マ———シャ!!」

残るは2m間隔に並べられた12段の飛び箱のみ。計4つ。それを越えれば（規定では側面に足をかけずによじ登る事ができれば良い事になっていた）後は、300mの直線コースで勝負が決まる。飛び箱は4列用意されていた。真里砂が助走に入った時、隣の列の2つ目の所でもう一人残っていた中等課の女子が足をくじいてうずくまった。男子2人陸上部の先輩達は2つ目と3つ目の所によじ登ろうとあせっている。

真里砂は陸上部に入る前、半年ほど体操部だった事があった。

飛び箱の向うにきちんとマットが置いてある事を頭のはしで一瞬確認すると、真里砂はためらわずに思い切り蹴って飛び跳び越した——。

1つ。2つ。3つ。

深く着地し、すぐに体を起こして助走に入り、そのまま一步半でまた跳ぶ。

いや、跳ぶというよりはむしろ飛ぶに近かった。

※（1） 10cm幅の細い板の両側に、一面粘着性の強い塗料がしきつめてあり、平均台と同じような役割を果たすが、一度足をつっこむと抜け出るのが大変なばかりでなく、後々までベタベタ走りにくくなるので、よりタチが悪い。

P6.

半年やそこら何をしようとも普通の人間にできる真似ではとてもない。

白い閃光がひらめいて行くようだった。応援はもう熱狂して叫んでいる。仙の白鹿のようなヌピードで速技で真里砂はトップに踊り出た。

そして4つ目に飛びつき飛び降りようとした時――――。

ひゅっ！ と短く息を吸い込み、真里砂の体は呪縛にかかったかのように動かなかった。腕を飛び箱の上に突っ張り、両脚を前に降り出して今にも着地に移ろうという姿勢のまま――それでも、地球の重力（若しくは慣性の法則）だけは動き続けているらしかった。真里砂は落ちた。

いや、陥ちた、と言った方が正しかったかも知れない。逆らおうとするだけの意志が動き始めるその間もなく、不意に眼下着地点に現われた（若しくは消滅した）灰色の虚空に音もなく吸い込まれたのだ。熱狂していた観客は、一瞬、視神経に伝わったものを脳に吸収し切れなかったことができなかった。斧で断ち切ったような静寂が訪れた。誰もがその存在する空間にはり付けられてしまったかのように動けなかった。

~~唯、雄輝だけは別だった。唯二人を除いて。~~

雄輝はゴールでストップウォッチを握っており、最初、真里砂は単に着地に失敗しただけなのだろうと思っていた。~~考えていた。~~

だが、かけつけて見て、そうではないとわかって、彼は一瞬たりと足をとめず、信じ難い現実の向うに真里砂の姿がかすかに薄れて行くのを見た時、彼は一刻もぐずぐずはしていなかった。思考が脳細胞を駆け巡るのより速く、筋肉に命令が伝わるのが彼だったのだ。~~雄輝の行動の全てだったのだ。~~

そして、校庭の反対側に居た鋭もまた~~一瞬の遅れをとっただけだった。~~一瞬たりとも遅れてはいなかった。

鋭は熱心な科学絶対主義の信奉者だったが、それと同じくらいS・F

P7.

小説に傾倒してい、さらに彼の伝で言わせれば「全ての現象は科学的に説明される事が可能」なはずだったので、“科学的に説明”できる物事を彼が恐れて彼がパニックに陥るなどという事はありえなかったのだ。

虚空は、わなにはまった一人の少女と、おくれてかけつけ、自らの意志で身を投じた少年二人をわけもなく飲み込んで姿を消した。

その間1分とはかからなかった。長い沈黙を破り、不意に真里砂の養母が泣き出した。

そして、その後の学校側の必死の捜索にも関わらず、三人の生徒が大衆の面前目前で姿を消した原因も、あの虚空の正体も、姿を消した子供達自身すらをも、遂に地球上において発見される事は

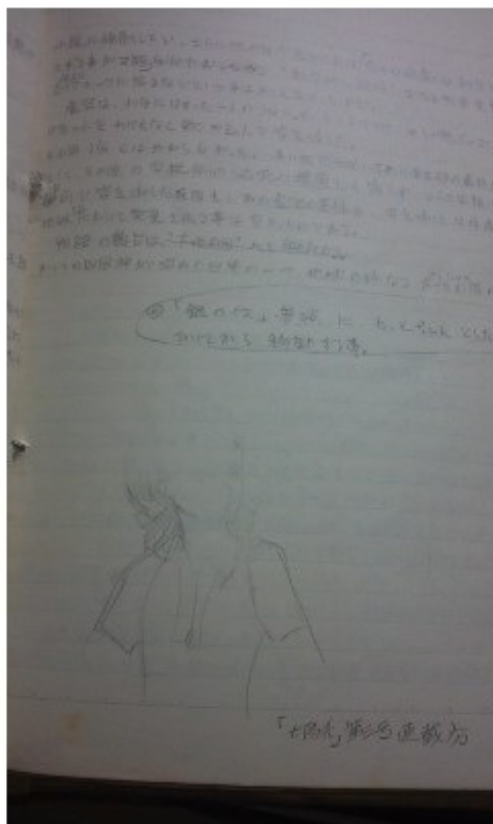
なかったのである。

物語の舞台は“大地の国”へと移行する。

かつての四国神が治めた四界の一つ、地球の姉なる大地の国（ダレムアス）へと移行する。

◎「銀のイス」参照に、もっとちゃんとした伏線を
ひいてから移動する事。

☆シャーペンで描きかけでハンパに消した、体操服姿で斜めに振り返っている「見返りマーシャ」の胸像画あり。



（「太陽系」第三号連載分）

2007年7月14日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

※※ 翼人 (よくんど) ※※

「待って！ 待っ！ ……」

自分の叫び声に驚ろいて、真里砂は急にはね起きた。「……あ……？……」

確かに何か大事な夢を見ていたのだ。が、夢の記憶はあっという間に飛び去ってしまった。

「思い出せない……あれは、一体なんなの？」真里砂は半ば状態を起しながら痛む頭を振ってつぶやいた。それから「えっ!？」

真里砂の目前すぐの所には、ガサガサと赤茶けた、~~七か七暖かい色の~~がっきりと灰色がかった太い木の幹があった。慌てて振り向けば、5m程下に、地面。

真里砂は木のまたにしつらえられた、鳥の巣に似たプラットフォーム (舞台) に寝かされていたのである。

気絶したまま落ちてしまわないようにとの配慮からだろう。使い古した帯のようなもので上手に体が幹にくくりつけられてある。

「——そうだわ。障害物競走の途中だったのよね。」……真里砂はあぜんとしてつぶやいた。パニック状態におちいってしまうのを防ごうとして、~~真里砂はわざと大きな声を出して言った。彼女は、これ程現実離れのした事はまあだなかったけれど、誘拐されかけたとか休みに登った出で遭難したとか、年の割にずいぶん豊富な経験を持っていたので、非常事態に出つくわした時に何よりも大事なものは何であるのか既に知っていたのである。~~

手早く帯の結び目をほどきながら、真里砂は辺りのまうす様子を見渡す。

下には隠陽樹たちやぶやつる植物がびっしり生ひ茂り、頭上には20~30mの向うまで見覚えのある針葉——見た事のない針葉樹のこずえが突きだしている。

かなり大きな森の中のようだ。

太陽はまだ傾き始めたばかりのところらしいが、真里砂のいる所まではほとんど光が届かない。~~それに寒い。~~

はえている植物は全て見覚えのあるものばかりであるのに、ここではもう落葉樹の葉は全て姿を消し、からみついたつたも黄色くなって小さな実を残すばかりになっている。

冬仕度はすっかり終わっているのだ。と、言う事はここは真里砂がいた学園のあった朝日ヶ森ではないのだ。季節がずれているのか——さもなければずっと北に位置しているのだ。

北と言え、そう本当に寒い。初雪でも降りそうな温度ではなかろうか。くしゃん！ 半袖短パンという格好では手もなく、鳥肌たった両腕をくんでしきりにこすった。はく息が白く流れて行く。

——が、寒さのおかげでかえって頭が冴えたようだった。不思議に落ちつきかえっている自分

を知って真里砂は少しばかり驚いたくらいだ。へんだわ、わたしってこんなに図太かったかしら——。しか七

冗談じゃないわ。真里砂は思った。いきなり足もとの地面が失せた時のあの恐怖感。上も下もなかったあの灰色の空間。ぞっとする。なんだって……「あっ!？」

真里砂は心の中で小さく悲鳴をあげた。そんなまさか——いや、だが、順序が逆なだけである。灰色の虚空。恐怖感。……

それは真里砂が覚えている最も古い記憶だった。あの時までは、確かにそれ以前のでき事も自分の素姓もわかっていたはずなのである。そして、寒さ。

森の中を迷っているうちに10月の雨に打たれて、肺炎を起こした。熱のひいた後はもう何も覚えていなかった。

しかし————共通する、灰色の空間の記憶。その意味するところに気づいた時、真里砂は、自分の血が音を立ててひいていくようなのをはっきりと意識した。

そんなまさか————それでももう一度否定した。6年を、地球の、近代文明社会の中で育ったのである。いかに真里砂が空想好きであろうと、とっさの事には信じられなかった。小学6年生にしてはかなり分別臭い方に育っていたのだ。

そんな——でも、本当なのかしら？ 本当に、ここが、わたしの故郷（ふるさと）だなんて事が、——（S.F.の読みすぎじゃないの）——ありうる、の、かしら？ かしらね。

(10/11分)

2007年7月15日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

いろいろ考え併せると、感情的に信じられようがられまいが、理論的 (!?——あやふやなものだが) に、そうとしか説明しようがないようだった。自分の髪が緑色だなどという非現実的な証拠がなかったならとても信じられなかったろう。真里砂ははっきり意識する程にうろたえた。故郷へ還りたい、本当の両親に会いたい、自分の名前、自分の記憶を取り戻したい——……
こういう、つき動かされるような感情は、ずっとずっと昔から持ち続けていたのだ。だが、薄ぼんやりとだが真里砂は覚えてもいた。奇妙な話だが、~~記憶を失う直前の、自分の心理状態を、である。~~

~~何かが恐ろしくて悲しくて真里砂は逃げだすためにあの灰色の空間へかけこんだのだ。~~

~~40度を越す高熱にうかされて生死の境をさ迷っていた時も、真里砂は必死でその何かから逃げる事しか考えてはいなかったのだ。それが幼なかつた真里砂にとっては死神より恐ろしいものであった事も確かだ。事実、夢の中で真里砂は“魂の導き手” (ルーリーズ) と名乗る男に連れられて冥界の扉へまでも行ったのだったから。~~

~~それから？—それから先はない。夢はまだ続いていたはずなのだが、心の錠が降りていて、どう七ても思いだせないでいるのである。~~

~~「そうだわ」真里砂は瞬目を輝やかせて一言ちた。「今さっきの夢——あれは、あの夢の続きだったのよ。それから、「駄目ね。どのみち思い出せないわ。」~~

~~記憶を失う直前、何かが恐ろしくて悲しくて自分がそれから逃げ出そうとしていた、という事である。~~

冷静に考えてみれば、記憶を失った事だって高熱の為というよりは恐怖感に精神が耐え切れなかったからなのかも知れない。小説などではよくある話である。

真里砂は自分が臆病ではない事を知っていた。だからこそ、逃げだしたいという感情が記憶をも飲み込んでしまう程のでき事、を、思い出す事が怖ろしかったのだ。

どうするべきだろう？ 何をどうするというのか、とっさの間に真里砂は考え続けて、それから、苦笑した。

馬っ鹿馬鹿しい。仮にここがわたしの生まれた国だったとしても、わたしが思い出したいと決心したからって、はい、さいですか、なんて記憶が飛んで来るわけではないじゃないの。と言う訳である。それよりも今現在どう動くべきかを考えなければならない。

このままでは早晚風邪をひいてしまうであろうし、雨でも降って来た日には、あの記憶を失った晩の二の舞だ。真里砂は、とりあえず物事をきわめて实际的・即物的に考えようと努める事にした。

「うわあ」 考えてみるとひどい事態である。西も東も、大体が今自分がどこにいるのかさえ

わからない。自分の髪の色を勘定に入れると、ここが地球上であるか否かまで疑わしいのだ。昨年、養父である有澄氏の友人達に連れられて休みに連れられて登った槍穂高で見事遭難してしまった事があったが、あの時だって雄輝と二人だったし、シュラフも、わずかだが水と食糧もリュックサックに入っていた。霧がひどかったとは言え、ちゃんと登山地図も持っていて、最後には自力で下山できたのである。

甘い考えを起こさない為もあって、ここは地球上でない。と直感的に断定してしまう事にした。

ではどこなのかしら？ 真里砂はその答を知っているような気がした。だがその事について考えるのは後まわしだ。それで？

昨年——昨年ね。真里砂は対策を考えつづけた。でもあの時は登山用の長袖長ズボンだったし、寝袋だってちゃんと持ってんだわ。食料と水はやっぱり無かったけれど。それに雄輝と二人だったしね。雄輝どうしてるかしら。さぞかし慌ててる事でしょうねえ。少しは心配しているかしら。鋭は？ ………

まさか二人が自分を追って、同じ世界へ来ているなどとは、雄輝の無鉄砲さから見ても十分に考えられる事ではあったのだが。真里砂は夢にも思ってみなかつた。そしてそれだからこそ真里砂は、事態がかなり無茶苦茶に進

真里砂はまさか二人が二人とも自分を追いかけて同じ世界へ来ているなどとは知らなかつたし、夢にも思っただけではなかつた。雄輝の無鉄砲さをころっと忘れていたのである。くしゃん。

バササッ

大きな羽音の不意打ちをくらって、ぎょっとして上を見上げた真里砂は、あやうく枝の上の舞台（プラットフォーム）からずり落ちそうになって、「おっと危ない」

いせいのいい腕と声とにかかえられた。

真里砂は翼のはえた彼らの姿を見て驚かなかつた。いや、驚くには驚いたのだが、その驚きは瞬遅れて——つまり、有翼人種を見ても自分が驚かなかつたという事実に驚いたのである。自分が驚かない事に驚くなんてホント驚いた話だ。

振り向けば、そこにいた優しげな青年も、やはり、肩から後ろへ大きな翼が伸びていた。

不意に真里砂をとりかこむように現れた鳥人たちは3人。兄弟らしい若者と男の子と、それからその母親と覚しき女性だった。

「まあまあまあ」

ふっくらと暖かい顔をしたその婦人が、とん、と真里砂の隣に降りた。茶色の髪、茶色の目、鳥そっくりのその翼も同じ茶色で見るからに親しげな様子をしていたので、体をこわばらせてその翼ばかりを見つめていた真里砂も少しばかり警戒をといた。

「ほんとにまあ」 その女の人はもう一度繰り返して言った。

「何て恰好でしょうねえまあこの寒いのに。まあかわいそうに。さあさあ毛布を持って来てあげましたよお嬢ちゃん。おくるまんなさい。早く早く。それから話を聞きましょうねえ。——あら、言葉がわかるとよいのだけれどねえ」

「解リマス」 発音に疑問を持ちながらも、真里砂は用心しいしいこれだけ言った。別に鳥人が

日本語や英語を話したわけではない。どころか全く聞いた覚えもないような言葉であったのに、なぜだか真里砂には確かに理解できてしまったのだ。

~~だが真里砂はこの時、有翼人種を見たおかげですっかり動てんしてしまっていたので、その事を不思議ともなんとも思わなかった。~~

「解るわ——」真里砂はもう一度確認するようにしゃべった。「——あら本当。ええ？ なぜかしら？———?!」真里砂はまたもうろたえなければならなかった。本当に全然知らないはずの言葉なのだ。

今度は顔を見合わせるのやは有翼人——翼人（よくんど）たちの方である。

「さあさあお嬢ちゃん。」女の人は座ったまま立ち往じょうしているような真里砂の上に優しくかがみこむと「シンマ、それをおよこし。」自分の小さい方の息子から小さなつぼを受けとって「暖ったまりますよ——落ちつくしね。さ、ほらお飲（や）んなさい」

そう言って真里砂の口の中にとろりとしたハチミツ酒の薄いやつを流し込んだ。

「——ありがとう。」真里砂は素直に感謝して。冷え切っていた体がほんの少しづつだが暖まって来たのだ。

「あの、ここはどこなんですか？ あなた達は？ わたしは——」

~~「どこって緑森の申に決まってるじゃないか、もちろん」シンマと呼ばれた方の男の子があきれた口調で言い返した。「その申のどの辺かって事なら~~

(10月18日分)

(☆体操服姿で黒髪おっぱカツラの「真里砂」と、

「マーシャ、23歳」とコメントのある緑髪バージョンのシャーペン+色鉛筆のイラストあり。)



2007年7月13日 [連載（2周目・大地世界物語）](#) [コメント（1）](#)

「りゅーん!!」

やぶかげから二人の人影が現われた時、木によりかかって考えにふけていた真里砂は思わず驚きの声を上げた。

「ゆまゆたくむるる・る・る！（あなたたちがどうしてここに!）」

「ふえろうぐん！（まぬけ!）」

雄輝が唯一覚えていたダレムアス語で切り返した。

「俺たちにわかるわけないだろ!」

鋭はあ然として二人の顔を交互に見比べている。気が狂ったのかと言わんばかりだ。

「ちょ、ちょ、ちょ、ちょっと、待ってよ！ よけい頭が混乱して来たじゃないか」

3人は今、見も知らない森に迷い込んでいた。辺りは速やたそがれて、夕闇がせまっている。真里砂が座っていたのは、とあるちょっとした空き地の片すみで、どうやってつけたものか小さな焚き火が明々と燃えていた。

—そして火の上には小さな白い美しい行平（ゆきひら）がかかっていた。

その火の上に小さな鼎がかけてあり、ぐつぐつと心地良い音をたてて何かが煮られているのを見つけた時、雄輝は無言のままどっかと座りこんであぐらをかいた。

「やれ、やれ。助かったぜ。そろそろ寒くてたまらなかったところなんだ。うん？ なんだこの鍋？ ——いや、今日はもう何が起ころうとも驚くのはやめだよ。実のところ空腹でメゲちまってるんだ。

「おら、鋭も座れよ。」

「——あ、うん。」

ここの気候は明らかに、3人がいたはずの朝日ヶ森の学園よりも厳しかった。さもなければ、季節がずれているのだ。かすかに西陽をとどめている空の向うを除いて、そびえたつ針葉樹の上に広がっているのは、どんよりとして鈍い、今にも降りだしそうな雪雲だった。

「俺の推測は当たっていたらしいな」 雄輝が鼎に指を突っ込みながら言った。

「あちっ！ つつつつつ——なんだよその顔は。」

鋭はどうせさっきからひどいすっとなきょうな顔をし続けていたが、今は真里砂の方がひどかった。驚く、とか慌てる、とかではなく、何かに脅かされた者の眼をして雄輝と鋭を交互に見比べているのである。

正直言って真里砂は怯えていた。何故この2人がここにいるのだろうか？ もしかしたら自分とはとんでもない

たしか、あれは、今日の昼の事だった——と、正気づいた後痛む頭を左右に振りながら、真里砂は一人で必死に考えをまとめようとしていた。混乱してしまっていたのだ。

そう、そう、そうだわ。足下にあったはずの土が灰色の薄ぼんやりした霧に変わってしまった時、わたしは確かに飛び箱の上にあったのよ。そう。

それから？ ——吸い込まれたんだわ。そして、気を失った。

「良ろしい」 真里砂は口に出してつぶやいた。「それから？」

気がついた時には、ここに倒れていたんだわ。ここ——ここ、とは、何処なのだろう？ ——？

「森の中」、そうね。単純な事だわ。

だが、何処の森の中かということになると、事は単純などとは言っておられなくなった。ここは明らかに少女の育まれた朝日ヶ森とは別の場所であり、どこまでも常緑針葉樹ばかりが連っている。

早や傾き始めた薄陽と雪雲を見つめながら、真里砂は今日が6年目の日に当る事を思い出してぎくっとなった。

真里砂が濡れそぼち、傷だらけになり、記憶すらも失って、嵐の晩に現在の養父母に救われたのが——つまり6年前の今日なのだ。

6年。それは真里砂にとって深い意味を持つはずの数だった。

「でも、でも、———それじゃ———?!」

真里砂はおののいた。いつか、いつかは自分が故郷へ還る時が来るのだろうとは思っていた。だが、こうも早くだとは考えてもいなかったのだ。

(10/4分)

北
東+西
南

—————>翼人の村

↑

樹—————

真里砂

↑

雄輝・鋭

2007年7月18日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

「くしゃん！」不意に鋭がくしゃみを始めた。

一旦は三回で止んだもので、真里砂が、「あら、3でほれられ、ね……」と言いだした途端にまた「くしゃん！」

後はたて続けにくしゃんくしゃんくしゃんくしゃん……くしゃみの大安売りだである。

そのうちに真里砂までが鼻をむずむずさせだしたので雄輝が笑いだした。しかし、

「わ、笑ってる場合じゃないわよ、雄輝。くしゃん！ わたしの服はびしょぬれなのよ——忘れてたけど、わたしもだけど、あなたたちの服だって濡れてるじゃないの。それに、そうでなくってもここずい分寒いと思わない？」

それを聞いて初めて雄輝も始めて少しばかり真面目な顔になった。

「確かにこりゃ12月ごろの気温だよな……おい、鋭！ そこら辺に乾いた木ぎれないか？ 火打ち石でもいいぞ！」 なけりゃ火炎放射器でもなんでもいいぞ！」

「ちえっ、なんでも茶化すんだから……」今度は鋭の方が恨めしげな声で言う。

それでもなんとかかんとか20分もすると小さな火の手が3人を暖め始めた。

もっとも、それまでにはその頃にはくしゃみのしすぎで鋭の横隔膜はしっかり痛くなってしまっていたが…… 「ちえっ！」

「腐るな腐るな。しかし“河童”でも風邪は引くんだなァ」と雄輝が妙な事に感心して見せるのので映画反論して、

「“コンピューター”は温度変化に弱いんだよ……。雄輝こそよく平然としてるね、まあナントカは風邪ひかないって言うからなあねえ。あ、僕はだれかさんと違って夏風邪はひかなかった。」

「抜かせ」

自称“コンピューター”その“河童”の鋭が相手では、単細胞の雄輝ははるかに分が悪い。

「おなかが空いたわね……」クスクス笑っていた真里砂がそうつぶやくと、辺りは急に静かになった。不意に、あ、

「あ、」と鋭がかすかな驚きの声を上げた。「雪だ……」。

なる程、確かに白いものがちらつき始めていた。多分風向きが変わったのだろう。先程までわずかにさし込んでいた薄日陽は姿を消して、代わりに灰色の厚くたれこめた雲が空を覆っている。

樹木の間で風から守られているのがせめてもの救いだった。

急に雄輝が一大自分だけ羽織っていたジャージジャージのジャンパーを脱いで、半袖短パンのまま左隣りにうづくまっていた真里砂に着せかけた。

「あ、いいんだ。僕は？」鋭が半畳を入れると雄輝があきれ、「おまえなァー応男だろ」「あら、女だからって特別扱いになんかしないでちょうだい！」憤慨して鋭にジャージを渡そうとする真里砂の腕を素速く雄輝がひき戻した。「マーシャ。半袖だろ。」

いつになく有無を言わせぬ口調である。それでも真里砂がぐずぐずしていると、「俺は妹に貸してやったんだぞ。兄貴の言う事が聞けないのか?!」

.....「はい——兄上.....サマ？」うわ、なんとなく気押されるのを感じながらも笑って、真里砂は茶目っぽく片目をつぶって、ジャージを羽おった。

正直な所、朝昼抜きプラス2000mの全力疾走の後では、この寒さはひどくこたえていたのだ。真里砂は幼な慣じみの荒っぽい優しさに感謝した。湿ったジャージがなぜだかとても暖かかった。

「緯度か経度か、とにかくどっちかがずれてるねえ」
鋭がこう言うのを聞いて、真里砂は、え、と思った。

「う～ん、この気温じゃあな」と雄輝があいづちを打つ。「なんとかしないとそのうち凍え死んじまうぜ。ほら、さっき言ってたろ？ 木の葉が散りきってないから、ここは今まだ晩秋なんだって.....」

「大体こうなった原因のあの穴の正体はなんだったんだろ？ 暗黒穴（ブラックホール）にしちゃ灰色っぽかったし」「そいつは後まわしだよ、

「.....面白そうな冒険だと思ったんだけどがなあ.....」と、再び森の中をガサゴソ必死で押し歩きながら、口先程には嘆いている様子も見せないで雄輝がぼやいた。一心地ついたとおろで木の洞でも何でも夜を越せそうな場所を探そうという方に話が進んだのである。

「寒くて雪が降るんなら降るで、そこら辺りにフォーンでも現われなかなねえかな」「——この森、街灯がありそうには見えないけどねえ」鋭が答える。「——この森、街灯が植えてそうには見えないわよ」まだ落ち着かなげに何かを考えている真里砂が答える気のない様子でしか答えようとしないので、雄輝はしかたなく話題を変えた。

「おおい、鋭。気違い博士殿。おまえの妖しげな科学的判断で行くところはどのあたりだ？」

「う～ん。とにかくあの暗黒穴（ブラックホール）ならぬ灰色穴（ニュートラルホール）のせいかおかげで緯度もしくは時間的にすっ飛ばされたことは確かだね。緯度的に言えば北——だから東北あたり.....かな？ 時間的に言うとちょっと判断つきかねるね。10月上旬から11月にすっ飛んだだけかも知れないし、もしかしたら何百年も後か先の11月だったけして.....」

「気温が低いのは高度のせいかも知れないぞ。ほら、学園のある朝日ヶ森の中にだってずい分高い所はあるだろう？」

「無理だよ。学園付近はあれでもう十分高原状になってるから、あれ以上登ると植生が違って来ちゃうんだ。ここは見た所、朝日ヶ森と同じような様子だろ？」「あ、そうか」

鋭は、こと理科に関する事柄である限り、小六にしてたっぷり高校生並みの知識は持っている。この場合、雄輝は頭が上らない。いわんや事態がこうもSFじみてきているのではなおさらである。冒険好きの雄

「朝日ヶ森名物の神隠 あの灰色の.....おまえ何てってたっけ？ 灰色穴（ニュートラルホール）

？ あれ、存外神隠しの原因かも知れないなあ」雄輝が真面目な顔をして言い出したので鋭がとんきょうな声をあげた。「神隠シィ!？」

「ああ。そうだおまえ転校したでで知らないんだよな。朝日ヶ森でもあの学園のある近辺な、古来から神隠しその他の怪現象が起こる事で有名な場所なんだぜ。現にうちの生徒でどう見ても神隠しとしか思えない様な失そうのし方をしたやつが創立以来10人はいる。そのうちの一人は何日かしてから東北の方で見つかったんだがな、あっ!!」と雄輝はいきなり興奮しだした。

「そいつが見つかった場所がやっぱ朝日ヶ森って森だったんだ。植生もここと同じはずだ！」

「ストップ！ 話を非科学的な方へ持ってかないでくれよ！」

いきなり真里砂はがヒステリックに笑い出した。それまで珍しく奇妙な表情で二人のやりとりを大人しく聞いていたのである。

「それで解ったわ！」 鋭があからさまにムツとした表情をするのにもおかまいなしに真里砂はなおも笑い続けた。「このわたしが怖えているっていうのにどうしてあなた達がそんなに落ち着いていられるのか、不思議でしようがなかったのよ」

雄輝と鋭は訳も解らないまま、ただぎよっとなって互いに顔を見合わせるばかりだった。

「そうね——」少し落ち着いたのか真里砂が続けた。

「巻き込んでしまった以上、黙っているのは礼儀に反するわね。すっかり話すわ……わたしが知っている限りはね。」

そう言って真里砂は、やおら座り込むと話し始めた。

2007年7月19日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

しばらく話すうちに、とにかく野宿できそうな場所を見つけようと言うので、三人はせっかく起したたき火のおきをていねいに土に埋めて歩き初めた。

先頭は一番図体の大きな雄輝で、続いて真里砂。真里砂は雄輝の後にちゃっかり小判ざめよろしく張りついたものでほとんど枝にさわりもせずに済むのだが、前二人を通した後の枝のはねっかえりをもろに受ける鋭は不平たらたら、ひっきりなしに悪態をついていた。

辺りの様子h、冷帯性の安 鋭に言わせるとれば「冷帯性の安定樹林」だそうで、小さい頃から朝日ヶ森のただ中で育っている真里砂と雄輝にはおなじみの風景だったが、ただ、もっと古びていて寂しげだった。天気の子か鳥影一つ見えず、暗い枝々を通して時折りのぞく空模様は、ますます重苦しく雪雲がたれこめている。

雪は少しずつはげしさを増している様子で、小一時間も歩く頃には、かきわけた枝から積りたての綿雪が降りかかって来る程になった。

「どんどん暗くなっていくな」鋭がつぶやいた。「夜までには避難場所を見つけないと……」「八甲田山になっちまう」「雄輝！ 遊ばないでよ！」

抗議しつつも真里砂は雄輝が一所にいる事に感謝していた。もしこれが鋭と自分だけだったら？

2人とも物事を真面目に考えすぎるから、さぞかしやり切れない気分になっていた事だろう。雄輝が、本当に真剣になるべき時には誰よりも頼りになる存在である事を真里砂はこれまでのつき合いで良く知っていた。

今も、そうだった。

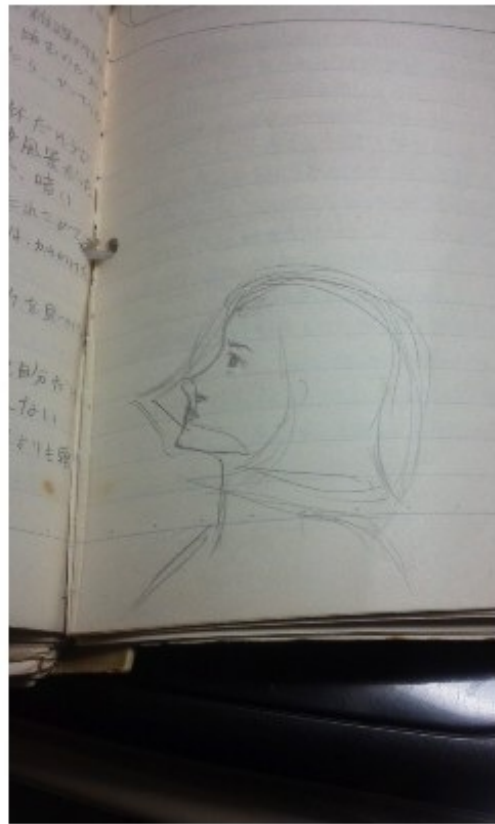
3人がそれぞれ胸の奥で考えていた、答を出すには少し重大すぎる疑問を最初に口に出して言ったのがは雄輝だったのである。

古いノートの「2. 森の中で」からパスタのシーンを持って来て、

「雄輝！ 鋭！……どうして!？」につなぐ。（←雄輝と鋭の魔法vsSF会話。古ノートより。）

野宿に適当な所を探してから火をたいて座りこみ、

「今、君、何語でしゃべったんだい……」に、つなぐ。



(第一章・「ここは地球じゃない」)

第1章 森の中で——1. ここは地球じゃない。

「だれ!?’ 夢の中で真里砂は懸命にもがいていた。「わたしを呼ぶのはだれなの!?’

呼ぶ声は高く、低く、遠く、近く、繰り返し繰り返し聞こえてきた来る。

真里砂は不思議な呼び声だけが木霊する空白の中に閉じ込められていたのだ。わけの解らない不安となつかしさを同時に感じとって真里砂の心は耐え切れず、叫んでいた。

「ここよ! わたしはここにいるわ!!」

すっと何かにひかれるような気がして、真里砂は自分の声に起こされて現実世界に立ち戻った

。

「あ……夢——…」

気がつけば、真里砂は露の降りた枯草の上に横たわっていた。

着ていた体操着もぐっしょり濡れて、体はすっかり冷え切ってしまった。

「よくもこんなになるまでのんびり気を失なってなんかいられたものね真里砂。」

自分を叱りつつ立ち上り起き上り、辺りの景色を見るに及んで真里砂はしっかり腹をたててしまった。

「いったい……何が起ったって言うの——!?’

ここは、どこかしら——。

さしもの真里砂も、次第に声が小さくなって行くのは隠しようがなかったを隠す事ができなかった。

実を言えば彼女はしばらくの間何が起ったのだからを思い出せなかったのであるが、木、木、木、——一面の樹。だった。

うっそうと頭上に生い茂る森の木々の梢が、陽の光さえもさえ切って真里砂を取り囲んでいるのである。

それから、ようやく自分がとんでもない冒険に巻き込まれたらしい事に気がついた。あの灰色の虚空間の事を思い出したのだ。

不意に頭上で激しい羽音がして、上を見上げる暇もなしに背中にとび色の翼をしょった少年が目の前に現われたのだ。

真里砂より3つばかり年下だろうか、地球ではギャングエイジなどと呼ばれるこの年頃の男の子にしてはなかなか優雅な動きかたで特有の礼のしかたをとった。

「遅くなってすみません。マーライシャ様ですね?’

(つづく)

.

本来なら真里砂は、まず翼をつけた少年の出現に驚いて然るべきだったのだろう。しかし彼女は少年の背中の翼よりも彼のしゃべった言葉に気をとられていて、自分が有翼人を見ても驚かなかった事や、むしろ、あら？！と思った程度であたりまえの事実として受け入れてしまった子との奇妙さにさえ気づくゆとりがなかった。

その言葉は何か不思議なリズムと抑揚を持ち、生き生きとしていて、聞きようによっては少年が何かの歌を口ずさんだ、ともとれるような感じだった。

そして、全く聞き覚えもないはずのこの言葉が、まるで生まれてこの方、使い続けているような自然さで真里砂の脳に伝達されたのだ。真里砂には聞いた瞬間にその言葉を理解できていた。

「——どうして——いえ、そうよ。え、え。そう。もちろんわたしは真里砂（マ・リシャ）...
...マーライシャに決まっているわ。」

—大言ち独りごちたこの言葉は少年の質問と同時に自分の内部への技にも答える為でもあったのだが、いつのまにやら自分自身の声までが不可解な抑揚を帯びているのに気がついて真里砂は背中がゾッと鳥肌立つのを感じた。（わたし、前にもこの言葉を使っていた事があるわ!!）

——直感だった。理屈もなにもありはしない。それに加えて真里砂（マリサ）——マ・リシャ——マ—シャ——マーライシャ。！

（どうしてこれがわたしの名前だなんて思ったの？ わたしの名前？ え?! ?! ）

その時になって初めて、真里砂は自分が両親の本当の娘ではなかった事を思い出す始末だった。

日頃あまりむつまじい親娘だったので、ともすれば自分の記憶の無さも髪の色すらも忘れきっている時の方が多かったのだ。

それに、6年も前の事だ。

「わたしは.....マ・リシャ.....マーライシャ店」

では、ここは、わたしの故郷なのかしら？ 緑の髪の間人がいて、魔法が世界を支配している.....？

真里砂はがくぜんとして突っ立っていた。

だが、恐怖感よりは理性と好奇心の方がかろうじて勝った。

それとも、勇気を保てたのは、初対面のしかも自分より年下のらしい男の子の前でしゅう態をさらしたくない——という、真里砂本来の自尊心の高さゆえであったのかもしれない。

とにかく真里砂はもちこたえた。

(つづく)

.

「あなたは誰なの？」

真里砂に尋ねられて少年は真っ赤になった。

「あ、無礼な真似してすいません。もし人違いでもしたら大変だって、そればかり気にして来たもんで……。ぼくはルンド家の第一子（ Pasta ） ・ クラダ。父はこの森の翼人（~~まくんど~~）鳥人族の族長だったんだけど、“会議”のすぐ後で病気で死んじゃって……だから今はぼくの母さんが族長です。それで……」

真里砂は耳まで真赤にして話すその話し方を聞いていてすっかり楽しくなってしまった。

「そんな訳で、帰って来たあなたを最初に出迎えるって名誉な役がぼくのものになった人間がぼくしかいないことになっちゃったんです。」

「帰って来た、ですって？」 真里砂は少なからずろうばいしておうむがえしに聞き返した。それじゃあ、じゃあ、じゃあ、本当に……？」

「もちろん、あなたは『やって来た。』って言おうとしたのでしょうよね？」

少年は不意の質問にあきらかに気分を害されたようだった。

「——ああ、。それはもちろんあなたが本当に帰るべき所はもっとずっと南の美七の白き都（~~ルア・マルライン~~）だけだ。遠いどこか別の土地なんだろうけど。ぼくが言いたかったのは、あなたがティカースからこのダレムアスの土の上に戻って来たって事ですよ。」

「……ティカース……丸い地の国……。ダレムアス……大地の国……。」

真里砂はぼうっとくりかえした。

丸い地の国（ティカース）が地球の事であるのならとしたら、大地の国（ダレムアス）……これは……

「じゃじゃ、あ、じゃあ！」真里砂の声は思わずつかかった。「ここは地球上ではないのね？」

それで……帰って来た、っていう事は、わたしは本当にこの国——大地の国（ダレムアス）——の人間なの?!

真里砂の、驚きと、~~歓喜~~と、恐怖の入り混じった奇妙な表情には気づかずに、Pastaはからかわれているととって怒り始めた。ので、そんなつもりではないと真里砂は大慌てで謝らなければならなかった。

こうなったら正直に話した方が良く、と判断して、「ねえ驚かないで聞いてちょうだい。実はわたし……」

先刻から使っている例の奇妙な言葉の中から“記憶喪失”の単語を見つける事ができなくて、真里砂は少し言いよどんだ。

(つづく)

.

すると、突然、急を告げる角笛の叫びが森中に響き渡って真里砂を驚ろかせた。高く、低く、高く。危険を知らせるかのようにせわしなく音色が変わって行くのだが、困った事に、それを聞きつけたとたんぱスタの顔がさっとこわばった。

「あの吹き方は“異変”の笛だ！ 館で何が起ったのんだらう?!」

それから抱えるようにして持っていた大きな袋包みを真里砂に渡して、
「大変だ。ぼくはすぐに館に戻らなくちゃ！ この中には着換えと、当座の食糧と、粗末なやつだけど届けられたた旅の道具一式。それに路銀も少々入れておきました入ってますから。それじゃっ！」

余程慌てていたのかそれだけ言うとパッと翼を開げて広げて飛び立とうとした pasta を、真里砂は慌ててギョツとして引き止めた。その場に一人とり残される事に恐怖を感じたのだ。pasta は持ち上げた翼もそのままにいとももどかしそうに首だけで振り向いた。

「なにか——……」

「あ、いいえ！ なんでもないの。あの……あなたはわたしの事を名前正体を知っているの？」

「いいえ……呼び名以外は聞いてません」と、あとなにかわけがあって地球(ティカース)からへ行ってた身分の高い姫宮だって事以外聞いてません。」

「あの、——そう。ありがとう。気をつけて、ね」

真里砂はしかたなく言った。

「マーライシャ様もお元気で。」

言うが早いか、あっというまに少年の姿は木々梢の向うへ飛び去ってしまった。

真里砂が、溜め息をつき、急にのしかかってくるような静寂の恐しさに怯えた時——。

真里砂の背後で下枝ややぶのしげみをかきわけ押しのける音がして、「おーっ!! いた、居た!!」

声と共に2人の少年達が姿を現した。わした。

「雄輝！ 鋭！ ……どうして——?!」

つかんで押した枝を、そのままへし折って前に出ながら、雄輝は空いている方の手でバサバアサになった髪をかき上げた。

ただでさえ切るのを面倒がって伸ばしっ放しだった蓬黒髪が、小枝やらくもの巣やらでひどい有様だ。

「どうしてって……何が“どうして”だよ？」雄輝が聞きかえす。

「だってだって——なんだってあなた達がここにいるのよ」

「決まってるだろ。おまえを追っかけて来たんだ。……ふう！ あ～あ、ひでえ目に会った。」雄輝は中途半ばに言葉を切って髪をかきあげ、足りない分を鋭が注意深く捕捉する。「つまり、僕らもあの“穴”に飛び込んだんだ。君と違ったのは自由意志だって点だけで」

しかし、それを聞いて真里砂はあきれかえった。あきれるとそうすると言葉がひどく速くなる

。

「なァんですってェ!? 馬鹿な！ 何が起こったのだから解っているの？ 帰れないかも知れないのよ!!!」

と、~~翼(つばき)~~雄輝の答えて曰く、

「面白そうじゃん！」

「おも☆」——ズル。

真里砂は絶句した。大いにズッコけた。

(なんて神経！ これでわたしよりも年上だなんて……)

いや、だが、何の事はない。確かに雄輝は無邪気にできているが、それにも増して真里砂が、並の子供にしては年不相応に大人びているだけなのである。

それにしても、雄輝はともかく普段は科学者ぶっている冷静な筈の鋭までがここにつっ立っているのは何とも言えない。

「鋭！ あなたもなの?!」……面白がっているのか、と、詰め寄る、という言葉がぴったりの表情で顔で形相で真里砂は問いつめた。

無論、そうだとでも答えようものならひっぱたいてやろう——と完全に頭に来ている。

「いや、僕は……」返事に窮した鋭の報こそいい迷惑であるだった。

「僕はまずあのブラックホールまがいの正体を突きとめてやろうと思ってたんだよ。それを雄輝が先に飛び込んだんでやむなく……さ、」

前半は真実だが、後半、特にやむなくの4文字はまったくの言い訳だった。

“コンピューター”と異名をとる鋭ではあっても、バロウズの非科学 (S・F) 的冒険小説 (スペースオペラ) に憧れるくらいの人間味はなら有り余る程持っていたちあわせていたのである。とは言え、興奮している真里砂はそんな事には気がつかない。

「そう——……」と真里砂。「なら、まあ、あなたは許してあげるわ。——雄輝！」

「あん？」

真里砂が凄まじい (例の口調の、かつて友人達から“母親みたい”と評された) 剣幕でまくしたてようとした時である。

「くしゃん！ くしゃん！ くしゃん！」

不意に鋭がくしゃみを始めた。

一旦は三回で止んだもので、真里砂が「あら、3でほれられ、ね……」と言おうとからかおうとした途端にまた「くしゃん！」

後はたて居たに水の勢いで、くしゃん！ くしゃん！ くしゃん！ くしゃん！ ……くしゃみの大洪水である。

そのうちに真里砂までが鼻をむずむずさせだしたので雄輝が笑った。しかし、

「わ、笑っている場合じゃないわよ雄輝。——くしゃん！ わたしもだけど、あなたたちの服だって濡れているじゃないの。それに、そうでなくってもここ、随分寒いと思わない？」

それを聞いて始めて雄輝も少しばかり真面目な顔になった。

「確かにこりゃ12月頃の気温だよな……」

上下ジャージの雄輝はともかく、真里砂に到っては競技の時のままの短パン半袖姿でふるえていたのである。それから気づいて、

「マーシャ、それは何だ？」

抱えていた袋の事を尋ねられて、真里砂は今さっき起った事を手短かに説明した。

有翼人種の話が聞かされて、雄輝と鋭は明らかに不信の色を顔に浮かべたが、とにかくその袋はおこに存在するのであり、その中味は役に立つものなのだ。

「とにかく……」と雄輝が言った。

(つづく)

.

「野営できそうな場所を探そう。」 雄輝が言った。

袋の中には真里砂用の着変えも入っているという事だったが、袋の口は固く縛ってあって、開けると、後が面倒そうだった。

不意に「あ、」と鋭がかすかな驚きの声をあげた。「雪だ……」。

確かに白いものがちらつき始めていた。

多分風向きが変わったのだろう、先程までわずかにさしこんでいた薄陽は姿を消して、代わりに灰色の厚くたれこめた雲が空を覆っている。「雪雲だわ……」と真里砂。

樹木の間において風から守護られているのがせめてもの幸いだった。

下やぶを押しのかきわけ悪戦苦闘しながら、先頭にたっていた雄輝が、手の空いたすきにジャージの上着を脱いで雄輝が後ろに袋を持ってついて来るかかえて続く真里砂に手渡した。

「あ、いいんだ。僕は？」最後尾の鋭が半畳入れると雄輝があきれて

「おまえなあ、一応男だろ」「あら、女だからって特別扱いになんかしないでちょうだい！」憤慨して鋭にジャージを渡そうと七たする真里砂の腕を、振り返った雄輝が素速く引き戻した。「真里砂。マーシャ半袖だろ。」

いつになく有無を言わせぬ口調である。それでも真里砂がぐずぐずしていると、

「俺は妹に借してやったんだぞ。兄貴の言う事が聞けないのか？を聞かない気か」

「——はいはい。……兄上サマ？」

なんとなくとはないに気押された感じで真里砂はやむなく引き下がった。

確かに幼な慣じみ兄妹同然に育ってはいるが、たまたま一つ年が違ったというだけで兄貴風を吹かされるのはどうも気に喰わない。

とは言え、正直な所、朝昼抜きプラス5000mの全力疾走の後では、この寒さはひどくこたえていたのだ。真里砂は幼な慣じみの荒っぽい優しさに感謝した。

湿ったジャージがなぜだかとても暖かった。

そんな二人のやりとりを見て、すねたのはまだつきあいの浅い転校生中途編入生の鋭である。

『 第1章 ここは地球じゃない。 (8) 』 (@高校1年。)

2007年7月27日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

P15.

おまけに鋭は最後尾で、並はずれた図体でぐいぐい枝を押しつけてゆく雄輝と、その後ろにちゃっかり小判ざめよろしく張りついてほとんど枝にさわりもせず歩く真里砂のはねっかえりを全部うけて、一通り通した後の枝のはねっかえりをもろに受けていたもので、もう不平たらたら、悪態ばかりついていた。

おまけに、加えて、くしゃみ、である。

「ちえっ、ちえっ、ちえ!! くしゃん! くしゃん! くしゃん! ちえっ!」

とうとう雄輝が笑いだして、

「腐るな、腐るな。しかし、“河童”でも風邪はひくんだなァ……」

妙な事に感心するものだが、実際転校早々に“河童”のニツタネームを頂戴した鋭は転校以来1日も欠かさず、10月に入ってもまだ、元気い天然屋外プールへ飛び込んでいたのだ。

「“コンピューター”は温度変化に弱いんだよ。」と鋭がやりかえす。「雄輝こそよく平然としているね。まあ、ナントカは風邪ひかないって言うからなァ、あ、僕はだれかさんと違って夏風邪はひかなかった。」

「抜かせ☆」

……と、自称“コンピューター”で“河童”の鋭が相手では、単細胞の雄輝ははるかに分が悪い。

雄輝のぶ然とした表情に、真里砂と鋭は顔を見合わせてクスクス笑った。

辺りの様子は、鋭に言わせれば冷温帯性の安定樹林だそうで、小さい頃から朝日ヶ森のただ中で育っている真里砂と雄輝にはおなじみの風景だったが、鋭にはひどく古びていて寂しげに見えた。冬の森、はまるで廃跡のようなのだ。

天気の子か鳥影一つ見えず、暗い枝々を通して時折のぞける空模様は、ますます重苦しく雪雲がたれこめている。

雪は少しずつはげしさを増している様子で、小一時間も歩く頃には、かきわけた枝から積りたての綿雪が降りかかってくるまでになった。

「どんどん暗くなって行くなね」 鋭がつぶやいた。「夜までには避難場所を見つけないと……」

「太陽系」第四号連載分。

(つづく)

『 第1章 ここは地球じゃない。 (9) 』 (@高校1年。)

2007年11月12日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#) [コメント \(1\)](#)

(p16)

「八甲田山になっちまう」

「雄輝！遊ばないでよ！」

わけのわからない情勢に、兄弟同然に仲がいいとは言え自分の出生にはなんの関係もない2人を下手をすると生命にも関わりかねない巻き込んでしまった内心の罪悪感のおかげで、つつい真里砂の口調はとんがってきた。

不機嫌の原因を考えれば本当におかしな話だが、なぜだかやたらに雄輝に当たり散ら八つ当たりしたくなってしまったのである。かろうじて真里砂は抑えていた。と、同時に、（更に矛盾した事には）、2人——特に雄輝と一緒にいる事を感謝せずにもいられなかったのではあるが。女の子、という条件は保留するとして、いかに気が強く、勇敢で、年齢以上の判断力を持っているにしても、真里砂はやはり12歳だった。もし2人が来なかったら、あの鳥人の坊やに取り残されたあとの自分がどんなに取り乱していたか——真里砂には容易に想像がつかたつく。だからこそ自分の頼り無さに腹を立てていたのである。挙げ句の果てには（雄輝の後にはりついている限りその要もないのに）辺りの枝に当たり散らして八つ当たりして、荒っぽく押したり引いたりしながら歩いて行った。たの。挙げ句の果てには辺りの枝を押ししたり、引いたり、雄輝の後ろにはりついている限りその必要もないんだのに、やたらに当たり散らして歩いて行った。

一行、わずか3人でそう呼べるものかは知らないが、は、見知らぬ森と雪の中でいたずらに円を描いてしまう愚を避ける為に、鋭の名づけて“3本の樹による直線の書き方”——をで進んでいた。つまり何の事はない、家庭科の時間に物差しの長さが足りなくなるとやる、あの手である。

↑ ↑ ↑ ↑

(※さし絵ページの説明※)

雄輝と鋭とが真里砂を見つけられたのも、2人が目をきました倒れていた2点をつないで、先例の“穴”に先に飛び込んだ雄輝の方向に延長してみたおかげだという。

大体の所要時間の割り合いから自分の推論、というより勘の正しさを証明してみせて、鋭は盛んに一人で得意がっていた。

~~サワ。サワ。サワ。~~

(つづく)

.

『 第一章 森の中で 1. ここは地球じゃない (没原稿) 』 (@高校一年。)

『 第一章 森の中で 1. ここは地球じゃない (没原稿) 』 (@高校一年。)

2007年7月16日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

のどが焼けつくように感じてわたしは気がついたのね。目を開けると、そこには全然見知らない人達が三人、わたしをとり囲むようにしてのぞき込んでいたわ。丁度、気つけ代わりに強いお酒を飲まされていた所だったのよ。

「ここは.....?」

わたしはそう尋ねただけけれど、聞こえなかったのか、さもなければ聞こえても通じてなかったんでしょうね。三人のうちの一人が身振りで黙っているようにと答えたわ。

それで、まだ頭もぼんやりしていたし、しばらくは様子を見ることにしたのよ。

「あ痛 (いた) 。いたた.....あち☆」

罵声とも悲鳴ともつかない声を発しながら、真里砂はやっとの思いで立ち上がった。頭がひどく痛む。

「——寒い!.....」と思わず口に出してつぶやいた程、彼女の体は完全に冷えきっていた。気がつけば、どこでどうしたものだか薄手の体操着がすっかり濡れそぼって体に垂れまわりついている。

辺りの景色を見るに及んで、真里砂はしっかり腹をたててしまった。

木、木、木、————一面の樹。 うっそうと頭上におい茂る森の樹々が、陽の光さえもさえぎって真里砂を取り囲んでいるのである。——「なんてこと!」。

一旦はかんしゃくを爆発させようとした彼女も、怒鳴った声をこともなげに吸い込んでゆく森の静かさを悟って怖じけづいた。——てしまった。

「いったい.....何が起ったって言うの!？」

ここは、どこかしら——さしもの真里砂も除々に声が低くなった。実を言えば、彼女はしばらくの間、自分の身に起ったことを思い出せなかったのだ。それから、ようやく自分がはとんでもない冒険に巻き込まれたらしい、ということを思い出した。——に思い当たった。

と——その時である。真里砂の背後で木々の下枝をかきわけ押しよける音がして「お——っ!

いた、いた!!」

声と共に二人の少年達の姿が現われた。——が姿を現わした。

「雄輝! 鋭!!.....どうして!？」

(☆シャーペン描きで驚いているマーシャの斜め顔のイラストあり)

つかんで押した枝をそのままへし折って前に出ながら、雄輝は開いている方の手でバサバサ

の髪頭をかき上げた。ただでさえ着るのを面倒がって伸ばしっぱなしだった黒髪が、小枝やらくもの巣やらでひどい有様だ。

(☆森の枝をかきわけながらひどい有様になって藪漕ぎしている二人のシャーペン描きイラストあり。)



「どうしてって……何が“どうして”だよ？」

「だって、だって……なんだってあなたたちがいるのよ」

「決まってるんだろ。おまえを追っかけて来たんだ。

……ふう！ ああひでえ目に会った。」

「つまり僕らもあの穴に飛び込んだ。

君と違うのは自由意志だって点だけで」

「なんですって!? 馬鹿な！

何が起ったのか解ってるの？

帰れないかも知れないのよ!!」

真里砂はあきれると同時にひどく腹が立った。

自分は恐怖していたというのに、こののほほんとした言い草はどうだろう！

と、雄輝の答えて曰く、

「面白そうじゃん」。

「おも☆」ズル。

真里砂は絶句した。大いにズッコけた。

なんて神経！ これでわたしより年上だなんて……

「鋭！あなたもなの？」無論そうだとでも言おうものならひっぱたいてやろう——と完全に頭に来ている。

「いや……僕は」返事に窮した鋭こそいい迷惑だった。

「僕はまずあの暗黒穴（ブラックホール）まがいの正体をつきとめてやろうと思って走り出したんだよ。それを雄輝が先に飛び込んだんで、やむなく……さ」。

「そう——」と真里砂。「なら、まあ、あなたは許してあげるわ。——雄輝！」「あん？」ところが真里砂が凄まじいけんまくでまくしたてようとした時である。

「くしゃん！ くしゃん！」

(10月25日分)

2007年11月18日 連載 (2周目・大地世界物語)

サク。 サク。 サク。

最初に歩き出してから既に2~3時間は過ぎ、辺りはすっかり暮れてしまった。

サク。 サク。 サク。

薄い競技用の靴を通して、踏みわける雪の冷たさが、じかに真里砂の足につたわって来た。更に4時間。5時間とたつて、~~辺りはすっかり暮れてしまった。~~歩くたびに肩へ雪が降りかかる。

「下手に動くとかえって危なくなってきたね。」 鋭が言う。 「もう目印の木を見つけておくのも難しいよ。」

それに対して雄輝がまた何か冗談口を言い、真里砂は珍しくぼんやりとそれを聞き流しながら、自分でも何を考えているのか解らないくなるような何事かを考えめぐねていた。三人は幾度か野宿に——夏か、せめて春だったなら——良さそうな場所に巡り合っていたのだが、その度に激しくなる風雪が追いたてる。

「おい真里砂マーシャ！ どうした？ ぼんやりして」

わざと景気づけるような雄輝の口調に え？となつて、真里砂は、はっと正気にかえつた。

雄輝と鋭が二つの大岩の間のすきまを検分している間に、そのまま歩き過ぎてしまうところだったのだ。おまけに真里砂は鋭の心配げ、不安そうな目つきまで見落としてしまった。

「なんでもないわ ちょっとボンヤリ考え事してて。そこ、眠れ泊まれそう？」

「マーシャのその袋の中味いかんによるけど——。どっちにせよ今晚はまあ眠らないほうが無難だろうね。とにかくその袋の中味を確かめて、火をたいて少しあたたまらないと」着る物と。食べる物と。どっちも足りないようだったらうとうと以上はだめだろうけど。」

「その前に、火打ち石でも、ほくちでも、マッチでも、ライターでも、ライターでも、マッチでも、火打ち石でも、火打ち金でも、なんでもいいから、何か火をつけるものを探してくれ！」

「がつつかないで何か火をつける道具を探し出しといてくれ。おれはまきになりそうなもの集めて来る。」「QX (キューエックス)。」鋭が答えて片目をつぶり親指でGOサインを出す。

「マーシャ早く入りなよ。えらく狭いけど、向う側に倒木があるんで風は防げる。落ち葉がつまって結構居心地いいよ。」

真里砂が腰をかがめて中へ入って見ると事実鋭の言う通りだった。横座りに座り込んでいざ袋の口を開こうとしたのだが、指先がぼんやりしてはっきり見えないようだ。

なんとなくそれは、口に出せなくて、真里砂は、指がかじかんじゃって……と言って鋭に渡したが、代わりに鋭のやっていた狭い岩穴の中央の落ち葉と土とをかきのけて火を燃す場所を作っているうちによやく頭が冴えて来て、気を取り直して鋭の悪戦苦闘している手元をのぞきこんだ。と、

「あら、なあんだ。そことそっちを同時に引けばいいのよ、鋭。単なる旅結びの一つじゃない—だわ。」

「え？ 旅結び？」

問い返されて、真里砂はまたさっきの奇妙に頭がぼんやりしていく感覚が戻って来て押しだまってしまった。

鋭が、しかたなく問いつめるのをあきらめて「~~こうかい？~~」と言われた通りにすると、簡単に袋を縛っていたひもはとけた。墮物で2人して単純に喜びながら色々中味を漁っているうちにふと鋭が思い出して聞いた雄輝も戻って来、不思議と手慣れた様子で真里砂が火打ちを扱うと、5分の間には幾本かの枯れ枝が明るく岩穴を照らし始めていた。

「——で？ 袋の中味何だった？」 寒さが少し楽になったところで雄輝が聞く。

鋭が答えて、

「シーツだか毛布だかわけのわからない風呂敷の化け物みたいのが5~6枚。厚手のシャツみたいのが2枚。下着の包み1つ。服が上下とも2~3枚。見た事のない食料ひと袋食器ひとそろい。剣と短剣ひと振りづつに弓矢ひとそろいの入ったらしき封印のして包み。あとあともう一つ平べったい袋があるんだけどこれはまだ見てない。」

鋭がまるで暗唱でもするかのように一気にまくしたてたもので雄輝は恐れ入った。

「……おまえ、よくそれだけ一度で覚えるな——……」 「誰かさんとは脳細胞のきたえ方がちがうんでね。」 ——真里砂はあいまいな微笑をかりうじでもらただけだった。真里砂がかりうじであいまいな微笑しか浮かべようとしなかったのにはあとの2人は気がつかない。真里砂は口の端を持たげて少し眠たそうに笑った微笑（わら）った。

(途中から大きくバツテン印で没にしてある★)

2007年11月18日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

サク。 サク。 サク。

最初に歩き出してから既に2~3時間は過ぎ、辺りはすっかり暮れてしまった。

サク。 サク。 サク。

薄い競技用の靴を通して、踏みわける雪の冷たさが、じかに真里砂の足につたわって来た。更に4時間。5時間とたつて、辺りはすっかり暮れてしまった。歩くたびに肩へ雪が降りかかる。

「下手に動くとかえって危なくなってきたね。」 鋭が言う。 「もう目印の木を見つけておくのも難しいよ。」

それに対して雄輝がまた何か冗談口を言い、真里砂は珍しくぼんやりとそれを聞き流しながら、自分でも何を考えているのか解らないなくなるような何事かを考えめぐねていた。

三人は幾度か野宿に 夏か、せめて春だったなら 良さそうな場所に巡り合っていたのだが、その度に激しくなる風雪が追いたてる。

「おい真里砂マーシャ！ どうした？ ぼんやりして」

わざと景気づけるような雄輝の口調に え？となつて、真里砂は、はっと正気にかえった。

幅50cm程の、半ば干からびかけた自然の溝に危うく落ち込むところだったのだ。

「なんでもないわ——ご免なさい。ちょっと考え込んでちゃってて」 真里砂は慌てて溝を踏み越えた。

「さっき話してた、鳥人とかの事？」 後ろの鋭から尋ねられて、あいまいに首肯する。

「ここがどこでおまえが何者なのかって事だろ」

つうかあに雄輝が言い当てて、真里砂の顔を少しく赤くさせた。怒つたように真里砂が答える。

「ええ。——馬鹿みたいだわ。六年間考えても思い出せない事だって言うのに。」

「さあどうかな」と再び雄輝。

「おまえが何者かって事はさて置くとして、ここがどこかって言うのは現時、今一番の大問題だぜ。鋭。おまえはどう思う」

「さーあね～え」 鋭は少々すねた声で返事をしてからしばらく黙っていた。

「地球上だと仮定すれば、気候からして僕らの居た朝日ヶ森より緯度か高度の高い場所で、さもなけりゃ単に時間がずれただけで、ここは朝日ヶ森のどこかなのかも知れないね。だけど真里砂が言う通り、鳥大有翼人種が住んでるんだとすると……う～ん。それよりあの灰色の穴（ニュートラル・ホール）——何だったと思う？」

「通路」即座に雄輝が答え、鋭は世にも奇妙な顔をして「へ!？」と言つた。「異世界——魔法世界（マジックワールド）への通路さ、要するに。ここは俗に言う妖精界（フェアリランド）なんだ」

断定形で言われて、鋭は明らかに頭へ来てしまった。

「ちょっと待ってよ！僕は待った。その伝で行くなら僕は、次元の裂け目に落ち込んで、異次元もしくは地球以外の別の惑星に飛ばされたんじゃないかと思うんだけどね、幻想（ファンタジー）狂い。」

「なにをっ 自分だってSF気違いだろうが！」

怒った雄輝がぱっと振り向いて言い返したもので、三人の歩みはそれなり止まってしまった。

(大きくバツテンして没★(^^;)★)

2007年11月28日 連載 (2周目・大地世界物語)

幅50cm程の、半ばひからびかけた小川の跡に危うく落ち込む所だったのだ。

「なんでもないわ——ご免なさい。ちょっと考え込んでちゃってて」 真里砂は慌てて溝を踏み越えた。

「さっき話してた、鳥人とかの事？」後ろの鋭に尋ねられてあいまいに首肯する。

「ここがどこでおまえが何者かって事だろ」

つうかあで雄輝が言い当てて、真里砂の顔をさっと赤紅くさせた。

「ええ。」怒ったように真里砂彼女が答える。「馬鹿みたいだわ。六年かかって思い出せなかった事なのにだって言うのに」

「さあ、そいつはどうかな」と再び雄輝。

「おまえが何者かってのはさて置くとしても、ここがどこかってのは今一番の大問題だぜ。おい鋭、おまえはどう思う？」「さあね」

鋭は生返事をしてつけ加えた。「土台、判断を下そうにも、僕はマーシャの髪が緑色って事以外、何（なん）にも知りゃしないんだからね。」

すねんなよ、と、雄輝が笑った。当の真里砂もそれ以上の事など何も解っていないのだから。

「だけど多分、——十中八九——ここがどこであろうとおまえの生まれた所だ、って言うのは俺が保証してやるよ、マーシャ」

その言葉を聞いて、瞬間、真里砂と鋭は眉根間を寄せた。

真面目に言っているのか——それとも何かの冗談なのか、判断即座には判断がつきかねたのである。もう一度無言の質問を雄輝はいたずらっぽく笑ってうけ流し、鳥人と話す時に使った言葉で『お母さん』と言えるかと真里砂に聞いた。

「まいま——るんなまいま。」 真里砂が少し考えるようにしてから答えるともう一度雄輝は満足そうな笑い声をたてた。

「そりゃ、もちろん真里砂は覚えていないだろうけどな。」と、あとの2人が腹を立てたくなるぐらい秘密めかしてそっそりしゃべりしやべる。

「6年前、マーシャが朝日ヶ森の奥で熱出して倒れていた時——第一発見者は俺だったんだよな」

あ！ とどちらも察しの速い真里砂と鋭が同時に叫んだ。

「そう。その時マーシャはうわ言でその“まいま”を繰り返して呼んでいたんだ。」

まるま

まいま

るんなまいま

マイマ

ルンナマイマ

(つづく)

2007年11月29日 連載 (2周目・大地世界物語)

……………

しばらくの間、なおも木々をかきわけて歩き続け押し進みながら、沈黙が流れた。真里砂は完全に頭が混乱して自分が何を考えているのかも解らない有り様で、幾度もけつまづいては雄輝が鋭に危うい所で抱きとめら膝をついた。これは森歩きに慣れた彼女にしてはごく珍しい事だった。

「——そう。」最後に真里砂はつぶやいた。「それではわたしはこの——この大地の国ダレムアスという世界の間人なのね？ ここは——どんなわけがあったのかは解らないけれど、何か恐い目に遇わされていたわたしを、ひとりぼっちで追い出した故郷（ふるさと）なのね」

いつのまにか、雪は

「マーシャ、うれしくないのか?!」雄輝が、驚いた時の常でつい声音が大きくなりながら言った。貿易商だった両親につれられて外国生活を続けた後に、飛行機事故で孤児となって初めて日本へ戻って来た時の安堵感が脳裏にある。2年前の事だ。

解らないと真里砂は首を振った。

「もっと落ち着いたなら、もしかしたらうれしいとも思うかも知れないわ。だけど、自分が“帰って来た”のだなんて感じはまるでないのよ。それに——」真里砂はきつく唇をかみしめた。

「地球（ティカース）ではわたしは幸せだったわ。養女とはいえママとパパの娘で、外交官有澄夫妻の令嬢。演劇部の部長で朝日ヶ森学園小等部6年1組の有澄真里砂だったのよ。それがここではどう?! マーライシャという名前以外は何もない。氏素性すら解らない、ひとりぼっちのただの記憶喪失の少女だわ。」

「落ち着きなよ、マーシャ。」再び膝をついてしまった真里砂に後から手を差し伸べながら鋭が言い、真里砂は邪慳にそれを振り払った。

「恐いのよ。あなたには解らないわ!」

鋭は一瞬傷つけられた瞳をしてひるんだが、それでも辛抱強く真里砂が立ち上がるのを待っていた。

「マーシャ、そりゃあ僕には記憶喪失になった経験なんか無いから、どのぐらい不安になるのかは察しもつかないよ。だけど……少なくとも自分の親が解らない寂しさは知ってる。——僕は捨て児だったからね。」

真里砂は、はっとして顔を上げた。「おい鋭!—それ……」 「おい鋭、それ——！」 少し先で2人が追いつくのを待っていた雄輝が、尻切れるように問い返す。

「うん……」 悲しい時に時折り見せる癖で、少し首を斜めに傾けて鋭はうなずいた。

「そうなんだ。丁度こんな雪の日のね、バスケットかご生まれの孤児院育ち」

悔しさと恥しさから、薄暗闇の中で真里砂の瞳に涙が光るのが鋭には見えた。

震えるようにわずかに唇が動いたが、ごめんなさいという言葉は声になって出ては来ずに、真里砂はそのまま黙って立ち上がると、歩き始めた。

2. かがり火村

3人は歩いて、歩いて、歩き続けた。どこにも体を休められる場所は見つからず、一度立ちどまって真っ暗闇の中で真里砂の袋の申から衣服をひき出しただけで、ただ前へと進んだ。もう直進しているかさえも定かではなかった。

完全な暗黒になってから更に1~2時間。雪はいつの間にかみぞれまじりの冷たい氷雨に変わっていた。

雲が厚くたれこめ、どこまでも真暗な森の中である。雨に打たれてぐしゃぐしゃになり始めた雪がなお一相、3人の足を冷えさせる。今は真里砂が先頭に立ち、袋は雄輝がかついでいた。

その内に、それと気付かない程に細い野道に踏み入り、たどって行くと人間ふたりが並んで通れるくらいの幅でうねうねとどこまでも続いている林道にぶつかった。少しでも雨をしのぐためと万が一だれかが通るかも知れない場合に備えて、1m程の間をおいて木立ちの中を道に沿いながら、3人は下りの方向へと更に歩いた。

二~三十分もたって木々がまばらになり始めたのに気がついた頃である。急な葛折りの一つを曲がった途端、慣れてきた暗いどこまでも続く森の姿は消えて、三人はかなり急なスロープの上に立っていた。

夜目には真暗闇の中では殆ど見えはしないが、そこから先にはやや開けた谷合いの、良く区画された耕地が続いているようだった。

「——森から出ちまったらしいな」 雄輝が言い、鋭が頼りない声であいづちを打つ。雨足が、激しくなっていた。

(つづく。)

マーシャがおかしいという話から、「たよりのマーシャはあの通り……」の、雄輝と鋭の自分達に関する会話。

2007年12月12日 連載 (2周目・大地世界物語)

「おいマーシャ、どうする？」と、うねうねと折れ曲がり折り返しながらスロープの下へと続く道を指して、雄輝までが自信なげに尋ねた。

直ぐ道の先に、村らしき影と松明の炎が見える。ぐるりに柵を築いそめぐらせて大して大きな集落にも見えないのに物見やぐら檣までが築いてあった。とてもではないが、こっそりしのび込んで納屋かどこかで一夜を過ごしたりはできそうにもない。かと言ってこちらは真里砂以外は言葉も違う七通じないし、服装も、もしかしたら髪や目の色さえ——真里砂の髪が緑である事を考えれば——異なるのかも知れない。「マーシャ？」

雄輝と鋭が異常を感じ取るより早く、真里砂の体はぐらりと傾いたまま、雨に打たれたスロープの草地に足を取られて、声もなくころがるようにして落ちて行った。

一瞬、他の2人には、まるで無声の恐怖映画でも見せられているような感じがした。

「マーシャ!!」

落ちて行く彼女真里砂の手を捕まえようとして、鋭は自分もバランスを崩して倒れてしまった。雄輝がザッと草をなぎ倒して、ころがった鋭の脇を凄いスピードで滑り降りて行く。

「マーシャ! おいっ!!」

気を失っている彼女を膝の上に抱え起こして、雄輝ははっとなった。追いついた鋭を振り向く。

「——鋭。——ひどい熱だ——...」

そこへさっと松明の光が投げかけられた。「アルダムないまん!!」~~(見つかった!)~~ 鋭は思わず体を固くした。

(見つかった!) 雄輝と鋭は観念して振りかえった。

「アルダムないまん!!」

松明を手に現れた武装した村人たちは4~5人くらいだった。おそらくやぐらの上から降りて来たのだろう。黒や茶の短い皮の胴着に『古事記』に出てくるような型の厚手の布の下衣を着け、思い思いに上着をひっかけている。翼はない。一人はまだ少女と言っていい若い女性だった。更に、村の中が騒がしくなったかと思うと間に、手に手に弓やそして、~~全員が手に手に弓をたずさえていた松明をたずさえてあ~~という間に男女2~30人が問から飛びかけ出して来た。(ひえ~!) 鋭が小声でつぶやく。村人達の間では、ざわめいているうちに報告と伝達が終わっらしい。顔役と覚しき人間が数人、皆をかきわけるようにして前へ進み出ると、後を追うようかけ出して走り出て来た若者たちが松明をかざして3人のぐるりを取り囲んだ。

(つづく。)

アルダンないまム！

2007年12月13日 連載 (2周目・大地世界物語)

「いまム?!ディゑあるぞ!」

声.....おそらく誰何の言葉なのだろう.....は、かなり厳しい調子だった。子供3人と見て安心はしたものの、警戒をとく気はないらしい。もともとケンカっ早い雄輝が(真里砂を抱いたまま)すきあらば囲みを破って逃げ出そう.....と油断なく目を走らせているのに気がついて、鋭はこの上もなく慌てた。

人類皆兄妹。鋭は平和主義者なのだ。その割には剣道をやっていたりしてケンカも弱い方ではないのは確かだが、SFマニアである関係上、異種族が出っくわした時にいきなりドカンと突っかかる程、馬鹿な事はないと固く信じている。

第一、熱で気を失っているような真里砂を連れて、この冷たいどしゃぶりの中をどこへ逃げろと言うのだろうか?

「僕は.....」

害意がないのを精一杯見せようと、かじかんだ手の平を広げて肩の前に上げ(つまりはホールドアップだ)、半ばは必死、半ばはやけっぱちで鋭は前に進み出た。が.....

「まいま!」

この一言で全ての状況が変わってしまった。

気を失ったまま雄輝に抱かれていた真里砂が、悪夢にでも襲われたのかいきなりうわ言で口走り、何かから逃げ出そうとするかのようにもがき始めたのだ。村人たちの目には、真里砂が雄輝の手から逃れようとしているのだとしか見えなかった。そのはずみに、ずれかけていた黒いかつらが外れ、短く刈り込まれた緑色の髪が松明の灯りに照らし出される。

「マ ダレムアト まりゅしえやん く カラ!」

大地の国人(くにびと)の少女じゃないか! 一言叫んで、雄輝の腕から若者が真里砂をさらい出した。

「何をすっ!!」とり戻そうと必死に、前後の見境を失くした雄輝がつかみかかり、別の何人かに叩き伏せられる。止めに入ろうとした鋭の喉頸を、後ろから誰かが羽がいじめ羽交い締め式に締め上げた。

「違うっ! 違うんだ。僕たちは.....!」 もがこうとした鋭だったが、息がつまりそうになる目の端で真里砂が無事に女性達の手引き渡されて、暖かそうな灯のともった大きな家へ運び込まれたのを見て、やめた。

その頃には雄輝は散々抵抗した挙げ句に斧の柄で強打されて気絶していた。

文字通り引きずられるようにして村へ入れられた三人の背後で、重い末戸門が音をたてて閉じられた。

(つづく) .

2007年12月14日 連載 (2周目・大地世界物語)

「……………おかしいとは思ってたんだよなァ」

ようやく息を吹き返した次の日の午後遅く、牢屋代わりらしい倉庫の屋根裏の薄暗い一隅で、雄輝はしきりにぼやいていた。

真里砂の高熱に気がついてやれなかった事だ。

「あれだけ鼻っ柱が強く弱音を吐きたがらない奴が口に出して恐いなんて言うし、おまえの手ははねのけるし。思えばあの時にはもうかなり具合が悪かったんだろうなあずい分と具合が悪かった筈だよな。……畜生(チキショウ)。もっと早く気がついていりゃ、無理して歩かせたりしないでおぶってやったのに」

「実際ああやって倒れるまでは、一言だって自分から言いそうにないもんね。マーシャは。根っから気が強いみたいだ。」と鋭。気が強いなんて生優しいもんじゃないさ、と磊落に雄輝は笑った。

「しかし鋭、真里砂の奴、結局おまえにちゃんと謝ったのか？ あの時。」

……『あなたには解らないわ!』。いくら気が動転していたからと言って、ヒステリックにそんな言葉を投げつけるなど、普段の真里砂からはとても考えられないセリフだ話した。

「うん……。いや、仕方無いよ、あの場合」「……しようがないな、まったく！」雄輝は真里砂に向けて口で怒りながら、真面目に鋭の報へ顔を向けた。

「だけど、おまえのあの話が本当だとすると、俺は何度か気に障るような事を言っちゃってたようだな。悪かった。」

言われて鋭にももちろん心当たりはあったが、半月以上の前の事だけに、いきなり謝られるとかえって面食らった。

「雄輝はそんな古～～い事をわざわざ謝るのかい？」

すると雄輝が意外そうに答える。「当然だろ？ 何たって悪いと思うのと人を傷つけた事に関しちゃ時効なんぞないんだから。」

(……僕はとてもそこまでは潔くはなれない。) 瞬間的に表情に現れてしまった鋭の内心の動きには気づかずに、雄輝はどさりとわら床の上にひっくり返った。

「マーシャはどうなったかな……」 ぶん殴られてあっさり倒れてしまったのが何とも言えず残念なのだ。

「彼女は多分心配ないんじゃない？ 熱が高いって死ぬような事はないだろうし、大事そうに扱われてたもの。それより問題は僕らだよ。」

「そっちこそ問題ないだろ。奴の意識が回復しさえすりゃ、少なくとも俺たちとは合流できる。

三人いりゃ何とか後の事は何とかなるさ。」

「……そう、うまく行くのかなあ……」「何？」「うん、いや何でも無いけど……」

鋭は根っから自信に満ちた人間を見ていると必ず不機嫌になる自分の事を根っから嫌な人間だなあとのしりながら、同時に不安も抱え込んでいた。

(聞きかじった話を総合してみると)、真里砂が6年前に記憶を失ったのは原因は、何か恐ろしい目に遭わされて逃げていたを持っていた時に、雨に打たれて高熱にさらされたを出した事らしい。それも発見されたのは森の中を何時間もさ迷って、ようやく人家——有澄家の別荘——にたどりついた時にだそう。どうも今度と条件がそろおう。

(まさか、もう一度僕らの事まで忘れてはしないだろうな.....)

S.F的に発想を飛躍させながら、鋭はどうしてか“真里砂に忘れられる”事ばかりを恐ろしがっていた。

(第5号連載文)

(2009年10月30日追記)

続き?の設定変更メモ。

<http://85358.diarynote.jp/200910302342577899/>

1. ここは地球じゃない (没原稿) (@高校一年。)

『第一章 森の中で 1. ここは地球じゃない (没原稿) 』 (@高校一年。)

2007年7月16日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

のどが焼けつくように感じてわたしは気がついたのね。目を開けると、そこには全然見知らない人達が三人、わたしをとり囲むようにしてのぞき込んでいたわ。丁度、気づけ代わりに強いお酒を飲まされていた所だったのよ。

「ここは.....?」

わたしはそう尋ねただけけれど、聞こえなかったのか、さもなければ聞こえても通じてなかったんでしょね。三人のうちの一人が身振りで黙っているようにと答えたわ。

それで、まだ頭もぼんやりしていたし、しばらくは様子を見ることにしたのよ。

「あ痛 (いた)。いたた.....あち☆」

罵声とも悲鳴ともつかない声を発しながら、真里砂はやっとの思いで立ち上がった。頭がひどく痛む。

「——寒い!.....」と思わず口に出してつぶやいた程、彼女の体は完全に冷えきっていた。気がつけば、どこでどうしたものだか薄手の体操着がすっかり濡れそぼって体に重くまとわりついている。

辺りの景色を見るに及んで、真里砂はしっかり腹をたててしまった。

木、木、木、—————一面の樹。 うっそうと頭上におい茂る森の樹々が、陽の光さえもさえぎって真里砂を取り囲んでいるのである。——「なんてこと!」。

一旦はかんしゃくを爆発させようとした彼女も、怒鳴った声をこともなげに吸い込んでゆく森の静かさを悟って怖じけづいた。てしまった。

「いったい.....何が起ったって言うの!?!」

ここは、どこかしら——さしもの真里砂も除々に声が低くなった。実を言えば、彼女はしばらくの間、自分の身に起ったことを思い出せなかったのだ。それから、ようやく自分がはとんでもない冒険に巻き込まれたらしい、ということ思い出した。に思い当たった。

と、その時である。真里砂の背後で木々の下枝をかきわけ押しのける音がして「お——っ!

いた、いた!!」

声と共に二人の少年達の姿が現われた。が姿を現わした。

「雄輝! 鋭!!.....どうして!?!」

(☆シャーペン描きで驚いているマーシャの斜め顔のイラストあり)

つかんで押した枝をそのままへし折って前に出ながら、雄輝は開いている方の手でバサバサの髪頭をかき上げた。ただでさえ着るのを面倒がって伸ばしっぱなしだった黒髪が、小枝やらく

もの巢やらでひどい有様だ。

(☆森の枝をかきわけながらひどい有様になって藪漕ぎしている二人のシャーペン描きイラストあり。)

「どうしてって……何が“どうして”だよ？」

「だって、だって……なんだってあなたたちがいるのよ」

「決まってるんだろ。おまえを追っかけて来たんだ。

……ふう！ ああひでえ目に会った。」

「つまり僕らもあの穴に飛び込んだ。

君と違うのは自由意志だって点だけで」

「なんですって!? 馬鹿な！

何が起ったのか解ってるの？

帰れないかも知れないのよ!!」

真里砂はあきれると同時にひどく腹が立った。

自分は恐怖していたというのに、こののほほんとした言い草はどうだろう！

と、雄輝の答えて曰く、

「面白そうじゃん」。

「おも☆」ズル。

真里砂は絶句した。大いにズッコけた。

なんて神経！ これでわたしより年上だなんて……

「鋭！あなたもなの？」無論そうだとでも言おうものならひっぱたちてやろう——と完全に頭に來ている。

「いや……僕は」返事に窮した鋭こそいい迷惑だった。

「僕はまずあの暗黒穴（ブラックホール）まがいの正体をつきとめてやろうと思って走りだしたんだよ。それを雄輝が先に飛び込んだんで、やむなく……さ」。

「そう——」と真里砂。「なら、まあ、あなたは許してあげるわ。——雄輝！」「あん？」ところが真里砂が凄まじいけんまくでまくしたてようとした時である。

「くしゃん！ くしゃん！」

(10月25日分)

(続 ・ 没 原 稿)

(続 ・ 没 原 稿)

(続・没原稿) そのいち。

(続・没原稿) そのいち。

2016年1月22日 リステラス星圏史略 (創作)

幸い鋭の心配は全くの取り越し苦労であった。その日の夕刻、真里砂は入り陽の残光に起こされて、見知らぬ部屋で目を覚ました。

(ここは...?)

なんとなく、なつかしいような、不思議に落ち着いた感じの造りである。白い土の壁、茶色い古びたつやを出している太い柱。傾いた天井。むき出しの梁。真里砂は自分が寝台に寝かされているのか寝床にいるのか、ちょっと判断がつかかかっていた。真里砂を起こしたのは、脚の側の壁の反射光で、最後の残光とってしまったのは、その為だった。実際には、首を斜めに向けて見て初めて気がついたのだが、ひさしと窓じきいの間からのぞける空の空は、まだ鮮やかなオレンジ色に染まり始めたばかりの所である。

まだどこかはっきりしていない、半ば夢現つの状態のままにそろそろと上体を持ち上げてみた真里砂は、そこが普段は使われない客用寝室のようなのに気がついた。

肘をついて、見るともなしに部屋の中を見渡しながら、彼女は無意識に、空いた右手を自分の背後に伸ばす。指は静かに布団の上をすべり、突き当りで壁にさえぎられてしまった。真里砂は自分が一人で寝かされていた事を知って少し驚き、それから驚いた自分を不安に感じた。

(なぜわたしは一人で眠っていた事に驚いたのかしら? いつも一人じゃない。それとも誰かとなりにいる筈だったかしら...)

それからようやく頭がはっきりして来て、雄輝と鋭がどこかにいる筈だったのに気がついた。

キイ...

丁度その時、静かにドアを開けて、薬盆を手にした女性が入ってきた。

(続・没原稿 2)

2016年1月22日 リステラス星圏史略 (創作)

幸いな事に、鋭の心配はまるっきりの取り越し苦労に終わった。その日の夕刻、真里砂は臃ろげながら意識を取り戻すとすぐに、雄輝と鋭がどこに居るかと尋ねて、枕元へ呼んでくれるようにと村人たちに頼んだのである。

しかし真里砂の声は熱の為にひどくかすれて聞き取りにくかったし、村の男たち、殊に昨夜大暴れした雄輝から少なからぬ被害を受けた若い連中の中には、二人の少年に対する何かしらの誤解が生じているらしく、気力も体力も衰えていた真里砂にとっては、とにかく自分がいいようにするからあなた達は馬鹿な真似をするな...と、雄輝宛ての伝言を頼むのがやつの事であった。

かすれた、妙に震えるような筆跡で、どうにかそれをしたためると、複雑に角張ってみたり、急に丸く小さくなったりする非音楽的な文字のられつを傍らにいた少年に託して、真里砂は再び悪夢との最後の1ラウンドを闘い抜きに泥沼の淵へと沈んだ。

~~（その夜見た悪夢については、それがひどく大事なものであったという記憶にも関わらず、覚えていられたのは真里砂対もう一人の真里砂〜マーライシャ〜の闘いだっただけという事と、誰か雄輝によく似た年上の少年が必死に呼び求める声。そうして、結局の所、真里砂本来の姿は破れきって、仮の真里砂が勝ちを占めたのだった。が、現時点での真里砂が実は偽りの形なのだ、と本人が気づくのは、実際にはもっと後になってからの事である。~~

翌朝。真里砂彼女は朝焼けの最初の一筋に起こされて、どことなくなつかしい想いを抱かせるような、不思議に落ちついた造りの小部屋で目を覚ました。

白い土の壁、茶色い古びたつやを出している古い床柱、天井、梁。太い床柱。白い土の壁。明るい色合いの腰板。

朝焼けと思ったのは白壁の反射光で脚の側の天井近くに切っただけあるれんじ窓が狭いせいで、実際には、首を斜めに向けて見て初めて気がついたのだが、半開きになった観音開き様の窓から見える空はかなり明るい。まだ半ば夢現つの、ぼんやりした気分で辺りを眺め渡していた彼女は、やがてそこが普段は使われない客用寝室とか何かの類いなのだろうと見当をつけた。部屋には誰もいない。

おそらく37度2〜3分といった微熱と全身のだるさ以外、殆ど昨日一昨日の痕(あと)らしきものが残っていないのを確かめて、真里砂はにっと満足の笑みを洩らした。自分の体力と生命力に対する満足感である。

これまでも、真里砂は同い歳の連中が風邪だ流感だと言ってはばたばた1週間も2週間も寝込むのを横目で見ながら、寮母(ハウスマザー)の看護の助手をしてきたし、たまに熱を出す事があっても、誰よりも立ち直りが早いのだ。12歳の勝ち気な少女にとっては、これは十分自慢にしている事である。

丁度その時、扉を開ける物音がして、彼女は背中に枕ともクッションともつかぬ綿の塊をあてがって貰い、どうにか自分で食事を摂る事ができた。

「こいつ、おまえがもう一度記憶喪失にかかるんじゃないかってんで、夜も眠れなかったんだぜ」

ようやく真里砂の病室にひたてて来られた雄輝が、とうとう無理矢理白状させてしまった事実を種に鋭を笑いものにする。鋭が怒って枕を投げつけようと振り上げるのを、張り番の若者がぎろりとにらみつけた。少年二人...特に雄輝の方は、縄こそ打たれていないものの、重罪人扱いにされているらしいのだ。真里砂は大きな枕の上で楽しげに小さな声をたてた。

「だけどマーシャ、いったい僕らの立ち場はどういうものなんだい？」鋭が見張りを指さしながら興味しんしんといった態で聞き、「解らないわ」と真里砂は首をすくめる。

「あなたたちの事をティクト・ミリサイって言っているでしょ？ ティクト・ミス・アイ...地球人の少年たち。どうやら地球人ティクトが、わたし、大地の国の人少女ダレムアト・マリユシェヤンを、さらって来たっていう風に解釈されているらしいけど、この誤解はすぐ解けると思うの。それより... あら、鋭、なあによ。」

言い返されて、話している間中、じっと真里砂を見ていた鋭は、どぎまぎと赤面しなければならなかった。「いや、あの、熱が引いて良かったな〜と...~~いやつまり、僕らろくに食べてないんだ~~。そのゆで卵、いらなければ...」 「誤魔化そうって言うの？それだけじゃないでしょ。白状なさい」

「おい鋭。マーシャを怒らすなよ。怖いぞ〜」「雄輝!!」

鋭がしかたなく、小さな声で、「髪...」とだけ言ったのを聞いて真里砂は、はっと自分の頭に手をやった。

「あたしの鬘（かつら）！」

一昨夜落とした時から、真里砂の緑色の自毛はずっとむき出しのままだったのだ。言われて初めて気がついて真里砂はかなり慌てたが、それから、ここ...どこかは知らぬが...では、緑の髪をかくす必要はない筈だと気がついて、また少し笑って見せた。

(続・没原稿 3)

2016年1月22日 リステラス星圏史略 (創作)

(真里砂の身長145cm!)

幸いな事に、鋭の心配は単なる取り越し苦労に終わった。その日の夕刻、真里砂は臃ろげながら意識を取り戻すとすぐに、雄輝と鋭はどこに居るのかと尋ねて、枕元へ呼んでくれるようにと村人たちに頼んだのである。しかし真里砂の声は熱の為にかすれて聞き取りにくかったし、村の男たち、殊に昨夜大暴れした雄輝から少なからぬ被害を受けた若い連中の間には、2人の少年に対する何かしらの誤解が生じているらしくて、気力も体力も衰えていた真里砂にとっては、とにかくわたしがいいようにするから、あなたたちは馬鹿な事を考えつかないようにして頂戴...と、雄輝宛での伝言を頼むのがやっとの事だった。

かすれた、妙に震えるような筆跡でどうにかそれをしたためると、複雑に角張ってみたり、急に丸く小さくなったりする非音楽的な文字のられつを傍らにいた青年に託して、真里砂はもう一度、悪夢との最後の1ラウンドを闘い抜く為に泥沼の淵へと沈んだ。

翌朝。

彼女は朝焼けの最初の一筋に起こされて、どことなくつかしい想いを抱かせるような、不思議に落ちついた造りの小部屋で目を覚ました。

白い土の壁、茶色い古びたつやを出している太い床柱、天井、梁。明るい色合いの腰板。

朝焼けと思ったのは右脇の側の天井近くに切つてあるれんじが狭いせいで、実際には、首を斜めに向けて見て初めて気がついたのだが、半開きになった観音開き様の窓から見える空はかなり明るい。高さからして、寝かされているのが寝床なのか寝台なのか、ちょっと区別がつかなかったが、厚い毛布と洗いざらしの清潔な麻皮の布団のおかげで、すこぶる寝心地はよかった。が心地よかった。

壁の向い側に切られた暖炉の中では、半分燠になった薪が柔らかな光を放っている。まだ半ば夢現つの、ぼんやりした気分で辺りを眺め渡していた彼女は、やがてそこが普段は使われない客用寝室とか何かの類(たぐい)だろうと見当をつけた。

部屋には誰もいない。

二晩続いた高熱の痕が、おそらく37度2~3分といった微熱と全身のだるさ以外、殆ど昨日一昨日の痕(あと)らしいものも残さずに引いてしまっているのを確かめて、真里砂はにと満足な笑みを洩らした。体力には元々並はずれた自信があり、これは12歳の勝ち気な少女にとって十分自慢にしている事だ。

そろそろと上体を起こしてみる。

大丈夫と解ると、真里砂はもっと大胆に、布団から抜け出して窓辺へ歩み寄った。

昨夜の不得要領な問答からして、どうも雄輝と鋭はどこかへ閉じ込められてしまったらしいのだ。本当なら今ごろは学園で文化祭準備にいそしんでいる筈を、自分の巻き添えにして地球上でさえないここへ連れて来てしまったのは真里砂である。故に彼女には2人を元の場所へ連れ帰る義務があるし、その為には現在自分が起かれている立場をはっきり把握したい...と。その時そこまで完璧に考慮して、意識して体を動かしたわけではない。ただなんとはなしに自分の起かれている周囲の状況が解らないうちは落ち着けなかったからと言うだけの事だ。

兎に角。透かし模様木彫りに油紙のあまり明るくもない観音窓を用心深く引き開けてみると、2～3m程度の枯れた草地をはさんで低い土手の下に小川。その先にはなだらかな段々畑が広がって、向こうの森のふちまで続いている。少なくとも真里砂だけは、自由を拘束されてしまったわけではないようだった。

(続・没原稿 4)

2016年1月22日 [リステラス星圏史略 \(創作\) コメント \(1\)](#)

「あれ、まあ、お嬢ちゃん！」

かなり寒いのも忘れて寝巻きに素足で突っ立っていた真里砂を見るなり、確か一番熱が高かった時に着ききりで看病してくれていた小母さんが、手慣れた母親に特有のあの呆れると同時に叱りつけるような、素頓狂な声を上げた。

小母さんと言っても既に初老で、半白の髪に万葉風と言うか朝鮮のチョゴリの長いののような打ち合わせの上衣に、足元までのあまり広くない裾(も)を着けていて、上から無造作に毛皮のショールを羽織っている。小柄で瘦身のくせにどこか物腰に貫録があって、村の顔役の一人である事は容易に見てとれた。

食事の盆を提げて、やはり呆れた顔をして後ろに従っている息子の方ははたちぐらい。昨夜、雄輝の所に手紙を届けてくれたはずの青年である。

それだけ見て取る間にも口やかましく追いたてられて、真里砂は再び布団の中にへ逆戻りさせられた上に、明らかに面白がっているらしい青年の手で上から押さえこまれてしまった。真里砂は寝たままで口の中に食物を運び込まれるという、不名誉きわまりない事態に直面させられてしまった。

お腹は空いているし体力をつけなければと理性が勝手に口を開けさせるから、一応しかたなく食べはするのである。真里砂はその場に雄輝がいない事を感謝する気分になっていた。...もしこんな場面を見られようものなら、向こう半年間は子供扱いしてからかう種にされるに決まっているから。

「あの...」

食べ終わった後で、枕を少しばかり高くしてもらいながら、真里砂はようやく反撃のチャンスをつかむことができた。

老婦人は息子を見張りに遺してお皿を下げに行ってしまったから、部屋の中には真里砂と青年だけである。自分の、大人びてどこかあどけなさの残る細い卵型の顔が、大人にどんな影響を及ぼすかをしっかり心得てしまっている真里砂は、扎扎实り心の申で表情と相手に対する効果の程を計算しながら入れながら、会話の主導権を握るべく筋立てを考え始めた。

...相手が男であれ女であれ、どんな年齢の大人達からでも、欲しいものをねだり取るには一定の技術がいるものだし、その点で真里砂の腕に並べる者はちょっと他にはいないのだ。それは当の本人がスカーレット・オハラにも勝ると秘かに自負しているくらいで、一度そうとは知らずにアリス趣味のドイツ貴族に近づいた時には騒動持ち上がったものだったが、実際、その気になりさえすれば、彼女はかすかにグリーンのかかった黒い大きな瞳と伸びやかな四肢とを存分に使って、良い意味での少女のヨケットリというものでさえを、いくらでも完璧に演じてみせることができたのだ。

まったく、親が外交官などやっているといふと子供がろくな事を覚えな...と、真里砂の養父母はしょっちゅう楽しそうにそうぼやいていたものだった。

(続・没原稿 5)

2016年1月22日 [リステラス星圏史略 \(創作\) コメント \(1\)](#)

「え、あ、ご免ね」

しばらくぼけっとしているようだった青年が、しばし真里砂に見つめられた後から、ようやく気がついて慌てて答える。真里砂は内心辛棒強く、表面はごく幸せげな微笑みようで、

「昨日お願いした手紙。雄輝に...地球人の少年達（ティクト・ミリス・アイ）に、渡してもらえました？」

自分の口のきき方に比べて真里砂があまり丁寧でもの慣れた...マーシャは別にそんなつもりもなく、ただ思い出したばかりの言葉がまだ上手くあやつれなかつただけなのだが...話し方をするもので、青年は一瞬、気を飲まれて七まって返答に窮した。きょとんとした顔をしていた。

「ああ、そう。そうだった。今朝行ってきたよ。返事だと思うけどな、これを預かって来た。」彼が懐から取り出すのを受けとってみると、昨夜真里砂が書いたものの裏を利用して、かなり雑な字で2人からの返信が書き込んである。鋭がいつももちあるいている、あの万年筆だ。

横になったままで少し斜め上に向いて、真顔でそれに目を通しながら、真里砂は一度途中で手を止めてしばらく考え込むようにしながら、後の半分を一気に読み終えて丁寧に4つに畳みなおした。

「ひどいわ。」

不機嫌に口を結んで天井をにらんでいる少女いきなり言われて、「え？」 青年はもぞもぞ落ちつかなげに身を乗り出した。

真面目に自分の事を気づかっているらしいと気がついて、真里砂は少しばかり居心地が悪くなりもしたが、

「悪い事をした訳でもないのに閉じ込められていると思ったら、あなたたち、あの2人に食事も上げてくれていないのね。あんまりだと思うわ。」

親友2人への仕打ちに心底腹を立てているのも事実だ。

「悪くねえ、って...けどあの2人は、あんたを勾（かどわ）かして来たんだろ？」

「あの2人が?! 私を!？」

真里砂は絶句してしまった。それに、今になって気がついたのだが、青年の言葉は真里砂が覚えている大地の国ダレムアス語とは、微妙な所でかなりアクセントとなまりが喰い違う。

「馬っ鹿馬鹿しい、どうしたらそんな無茶苦茶な想像ができるの? 雄輝はわたしとは兄妹みたいに育ったのよ。鋭とだって、つき合いは浅いけど親友だわっ!」

「けど、しかし...」憤慨する真里砂の勢いにあ然としながらも、青年は一昨夜の状況を思い起こさせようと真里砂に話しかける。それを聞いて、真里砂は自分の態度が誤解を招いたらしいと顔

から火の出る思いだったが、あいにくそれで黙り込む程、かわいらしくはできていなかった。

「おとといは、わたし熱に浮かされていたし...」「そいじゃ、ホントに勾かされて来た訳でないんだね?」「当たりまえだわ」

完全に信じられてはいないと見てとって、真里砂は、つんと鼻を上向けたまま、機嫌の悪いのを隠そうともしない。「だけド。あの大きい方の奴はズイ分抵抗して暴れた」「当然でしょう?いきなり抱いていた私をつれさられたりしたら、雄輝、単純なもの。怒るに決まっているわ。」

「ふ〜ん... :

青年はまだしばらく考え込んでいるようだったが、ややあってから力づけるように笑ってうなづいた。

「ヨシ。ワかった。信じるよ、お嬢ちゃん」

それを聞くなり、真里砂は自分でもやや大仰と思う程、ぱっと喜色満面、という表情をしてみせた。

その頃には青年の、既に落ちついた外見に比べて青年が始めに感じたよりはずっと年若いらしいと気がついていたし、ただなりばかりでっかくなつたような子供っぽい雄輝ばかりを見なれた真里砂にしてみれば、この清々したお兄さんを是が非でも味方につけておきたいと思ってしまうのは当然の事とも言えるのだ。ただ年上の人間というものは往々にして予想外のものの感じ方をするもので、青年は陽が当たっているわけでもない彼女の顔をと真っ直ぐな視線とを、何やら驚いたようなまぶしげな表情で見返していた。

(続・没原稿 6)

2016年1月22日 [リステラス星圏史略 \(創作\) コメント \(1\)](#)

屈強そうな見張り付きとは言うものの、どうやら村長（むらおさ）夫婦の息子だったらしい青年の尽力のおかげで、少年2人が縛られもせずに真里砂の病室へ連れて来られたのは、それから1～2時間しての事である。

真里砂は見張りの3人を、自分の実力を承知しきっている少女らしい、やや高飛車な態度で部屋の中から追い払ってしまうと、青年だけは部屋に残ってもらって、雄輝と鋭にはちゃんと目の前でわたしのと同じだけの食事を食べ終えるまでは無駄口はきかない事、と言い渡し、空きっ腹をかかえて反撃の余裕の無かった雄輝が、

「おまえ、だんだんおばさまの口調に似てくるな～」と、さも悔しそうにぼやいた。

残念だったのは2人の食事が終わった時点で、今度は先ほどの小母さんがやって来て、真里砂の病気に良くないからと再び少年達を追い払ってしまった事で、抗議しようとする真里砂さえもが、「なんか知らん事情が有るようで無理に尋く気もないケドね、起きられネ事にはどうにもナラんでしょが」との小母さんの一言で黙らされ、やけに苦い薬湯のおかげでもう一度無理に寝かしつけられてしまった。

浅い眠りから目が覚めた時には、既に暮色せまる冬の夕暮れの中で、丁度暖炉の薪を足しに来た所だったさっきの青年が、や、と言って器用にも足で静かに扉を閉じる。

真里砂はいち速く熱も引いて自分がすっかり回復してしまった事を悟ると、青年に上着を借してもらって床の上に体を起こした。

小母さんが持って来てくれた、おもちの代わりに白玉だんごらしきものが入っている点以外どう見てもお汁粉だとしか思えないお八つをふうふうさましている内に、一度出て行ったまた戻って来た青年が、地球人の少年たち（ティクト・ミリス・アイ）にも差し入れて来た。と言いながら戻って来る。どうやらまたどこかへ閉じ込められてしまったらしいが、もうさほど気をもむ必要もないのだろう。真里砂は食べ終わった椀を青年に渡して湯飲みで冷たい水をもらうと、まんべんなく口の中をすすぎながら、しばらくの間ぼんやり考え事にふけていた。

暖炉にはぜる火は暖かいし、その傍らには今日知り合ったばかりだが親切そうな青年...実際にはまだ18歳くらいの少年なのだろうか...が早めに夜なべ仕事を持ち込んで来て、罨に使うばね仕掛けに油を引いている。熱はすっかり下がったし、この調子なら明日にはもう起きられるだろう。現在（いま）は頭を悩ますのもおっくうになる程とても心地が良かったが、明日になればもうそうも言ってはいられない。

真里砂は、自分の常に分別臭く将来（さき）の事にまで考えを巡らさなければ落ち着いていられない自分の性格を、なんとはなしに恨めしく感じた。

(続・没原稿 7)

2016年1月22日 リステラス星圏史略 (創作)

「ねえ、えーと、お兄さん」

話しかけられた青年は手を動かし続けながらひょいと顔を上げる。真里砂は名前を聞いていなかった事に気がついて、教えてくれるように頼んだ。「ヨリモ。"かがり火"村の長(おさ)、牧人(まきと)の、一人息子の"速手のヨリモ"(Pasta・スリオ・ヨリモ)だ。」

一瞬きょとんとしてから、真里砂もようやくそれが正式の名乗り方なのだったと漠然としながら思い出した。それはさておいて、ヨリモは年下の真里砂相手に礼儀をつくした事になり、少々自尊心をくすぐられていい気分にはなったものの、彼女は礼を返す事ができないのだ。

よっぽど養女先の有澄姓を名乗ってやろうかとも思ったが、嘘をつくようでどうしても嫌だった。地球に帰るか、失われた自分の記憶を取り戻すかしない限りは、真里砂は自分が名なしのごんべなのだと痛い程感じさせられたる。

「ありがと。わたしは真里砂。...マーライシャよ。」

苦々しさを抑えて、やっとの思いで微笑みながら、それでも言い終えると目を伏せるしかなかった。

案の定ヨリモは真里砂の態度に不満を抱いた様子で、作業の手も止まったまま顔をあげてじっと見つめている。それから何かわけありだろうと心を抑えて、ぶっきらぼうに、マリサと言うのは変わった名前だと言った。

「ええ。本当はマ・リシャだったのよ。愛称の」

「へえ。わりと西の方のなまりがあるのに、髪と名前だけは東なんだね」

「え、そうなの？」

言ってしまうから口を押えても、もう遅い。友達になった人間に正直である為には、全てを素直に白状してしまうしかなかった。

真里砂が所々言い淀みながら、忘れ病にかかっている6歳以前の記憶がまるでない事、"競技会"(レ・セイマ)の最中で不思議な洞(あな)に捕えられて、気がついたら森の中につれて来られていた事、全て話し終えてしまうまで、ヨリモはずっと黙っていたが、話の途中から急に話に魅かれたように、聞いた後から真里砂の身の上は気の毒だ、と言った。

「そうずっと、きみは自分の名前も、家も、血統も解らないんだね？ けど、養女になってたなら、その年だ、もう名前を贈られてもいいんでないか？」「ううん。わたしは、ずっと真里砂だったの」

いつの間にやら、青年の、少女を呼ぶ代名詞が『あんた』から『きみ』に格上げされている。

「そいで今までは地球人国(ティクティム)にいたんだね」

あやふやな口調でそう尋ねられた一瞬のうちに、よく理解はできなかったものの、真里砂は『地

球人国（ティクティム）』が『丸い地の国...地球（ティカース）』とは、全く別のものを指す事を直感で悟っていた。

「いいえ。私は大地の国人（ダレムアト）なのに地球（ティカース）にいたの。わたしたち地球（ティカース）から来たのよ。」

理解を越える言葉に、ヨリモの眉がぎゅっと一文字に引き結ばれた。がたんと腰掛けていた低い木の台から立ち上がり、さして広いわけでも部屋の中を大股に3歩、また2歩と落ちつかなげに歩き廻り始める。こうなると夜なべ仕事などは既に忘れられた存在だ。

「まさか。信じられない。丸い地の国（ティカース）への魔法通路だと？ 馬鹿な、女神眠りにつかれたる時よりこの方、そういったものは全て閉じられてしまっている筈だよ。それあ、勿論、偉大な術者や、精霊、不思議の旅人（たびと）といった大地の外の力を持つ者は、今でも自由に姉弟国の間を往き来できるとも言うし、古つ緑ヶ森のそのまた深奥はそのまま丸い地に続いているそうだが、仮に400年に1人、弟国（おとくに）ティカースから迷い込んで来る人間があったとしても、わずか6歳の女の子が、大地の庇護を失って"神なき国"へ脱け落ち得るなんて...」

「嘘じゃないわよ。わたしの黒いかつらは何処？ このおよそ短く刈り込んだ髪を見て頂戴。せめてあなたみたいな薄茶色の髪だったら良かったのに、地球（ティカース）では緑の髪って隠さなければならぬんだもの。」

真里砂には、ヨリモの言っている事の半分も理解が及ばなかったが、それでも、こんな話を聞かされてもおそらく地球人には信じられないだろうのと同じくらいのショックを青年に与えてしまったと気がついて慌ててつけ足した。

その間に彼は扉へ歩み寄ると、首だけ突き出して地球人の少年達（ティクト・ミリス・アイ）を連れて来てくれと怒鳴る。

その声を聞いて、真里砂は唐突に「あ！」と声を上げた。

「なに？」

「いいえ。なんでもないんだけど、ただ...ねえ、今、"木洩れ陽っ娘"（リマ・リクルメル）って言った？」

「そうだが...それが？」

どうしたと言う言葉を受けて、「それを聞いて不意に思い出したの。わたしの名前は..."木洩れ陽姫"（マダ・リクルメス）だわ。確かにそうよ。」

それから真里砂は既に暗くなった窓に目をやりながら一人言ちた。「...不思議ね。今までどんなひとかけらだってまるで思い出す事ができなかったのに浮かばなかったのに、まるで昨日の、あのよく覚えていられなかった夢のおかげで、記憶の封印に隙間ができたような具合だわ。"この世界"の事について、ほんの少しだけ思い出して来ている...。」

丁度そこへ雄輝と鋭が入ってきた。

(続・没原稿 8)

2016年1月29日 [リステラス星圏史略](#) (創作)

幸いな事に鋭の心配は取り越し苦労に終わった。その翌朝、意識が回復してすぐに村人達の間にあった誤解を解く事に成功した真里砂のおかげで、彼ら2人は食事ももらえない牢屋暮らしから解放されたのだったから。

真里砂はその為に自分が記憶を失って地球で育てられた事、今また記憶のないままに何かの力で大地の国(ダレムアース)に連れ戻された事...とを村の長(おさ)に話さなければならなかった。どういうわけだか、彼らは雄輝と鋭とが真里砂を勾(かどわ)かして来たのだと思い込んでいたのだ。

もっと奇妙な事があった。

←村人たちは、真里砂の地球(ティカース)...という言葉に確実に反応したのだ。驚愕と不安とでざわめきはしたものの、そういう異世界が存在するという事を事実として誰もが知っているのである。中の一人などは、わざわざ真里砂に向かってティクターズ...大地の国における地球人領(ティクトアース)...ではないのだなと確認したりして彼女を混乱させた。更に。

「不思議なのよ。覚えている筈もないのに、わたしったら、いよいよ自分の話を村の人たちに信じてもらわなくちゃならない段になって、ちゃんと正式の誓い方ができたの。困っていたら無意識に体が動いちゃって、口から言葉が出て来たのよね。多分、わたしきっと...鋭が心配したのと逆に、熱を出したおかげで少しずつ思い出し始めているのじゃないかしら」

←そう言う真里砂はここ大地の国(ダレムアース)の森の中に迷い込んだあの晩とは打って変わって、いつもの、小さな女王さま然とした表情で先刻からずっと話している。錯乱していた時に鋭にひどい事を言ってしまったのだけは都合良く忘れていて、らしい。鋭もそう執念深い方ではないから平気な顔をしている。

3人は今、真里砂の病室にとあてがわれた部屋にいたのだった。

畳とじゅうたんの合いの子のような、どうやら干した草wそのまま荒く編んだらしい敷物に、真里砂が寝かされているのはごく低い木の段になっている床の間に似た場所の布団の上。壁は白の土壁で、明るい色合いの腰板に茶色い古びたつやを出している太い床柱、天井、梁。木の透かし彫りに油紙を張りつけた、あまり明るくはない観音開きの窓が半分押し開けられている。

一見して客用寝室とわかる造りで、真里砂とは反対側の壁端では、見張りも一応兼ねて炉の火...暖炉といろりを半分づつ張り合わせたような構造の...の番をしている青年が、何か狩の道具らしいものを手入れしている所だった。

「わたしたちの事は、一応、普通の旅人みたいに扱うって言ってたわ。少なくとも、わたしの体がすっかり良くなるまではこの家...村長(むらおさ)の家なんだけど...に居なさいって言ってくれたし、その後でどこかへ行くって言うのなら...旅の仕度も手伝ってくださるって。」

真里砂はそう言って状況の説明をしめくくると、しばらく口を切って雄輝と鋭の反応を眺めた。

(別の没原稿 その1.) (たぶん小学6年生?)

(別の没原稿 その1.) (たぶん小学6年生?)

2016年1月29日 リステラス星圏史略 (創作)

(※鋭は5日間くらい朝日ヶ森の連中と行動を共にしてある程度うちとけ(たつもりになり)ダレムアスに来たあとから反発が目芽えてくる。)

(雄輝と鋭は半ば以上喧嘩腰で)話し合いに話し合いを重ねて、真里砂たちが旅立ちを決めたのは丁度一週間後の事だった。

一体ここはどんな所なのか、一度地球にこっちからさまよい出てしまった真里砂がどうして今また連れ戻されるようにして帰って来たのか、真里砂の素性はなんなのか、地球に帰る方法はあるのか...と、いくら問答した所でもともと解っている事が少な過ぎるのである。

「この村はかなり高い所にあるみたいだし、もうすぐ雪が降る冬が来る。根雪が積もっちゃえば春までこの村で足止めだぜ。そりゃ、ここは結構居心地のいい所だけどさ」

~~「だから馬鹿だって言うんだよ、君は。だからこそ西も東も解んない、おまけに魔法のなんのやらまで出て来る世界で、マーシャ以外は言葉も通じないっていうのに、世界に言葉も覚えないうちに出て行ってどうするって言うんだい? おまけに冬が近いとなればなおさらだよ。春までここにいたべきだ。」~~

~~「おい、鋭。最終決定権はマーシャにあるんだぞ。もう決まっちゃった事を今さらぶり返すな...」~~

~~「具体的な計画を練る段になっても最後まで言い合いを続けている2人を止めに入っって、真里砂はきっぱりした口調で鋭に言い切った。」~~

~~「明後日には村の大人達が幾人か、ここから三日の所にあるマーロム...つまりまあ領主にあたる人の館へ、出掛ける事になっているの。」~~

鋭だけはせめて言葉を覚えてからの出発にすべきだと最後まで反論し続けたが、最終決定権を持つ真里砂の一言で、不承不承、黙らされる事になった。曰く...

「馬鹿ね、ぐずぐずしていると、あなたたち、進級試験ウケられなくなってしまうわよ」

私立の朝日ヶ森学園では、進級試験を受けられなかった者は理由を問わず留年、なのである。まして真里砂と鋭にとっては、今年は中等部への進学をひかえた大事な試験だった。

~~「じゃ、おまえ...地球に戻るつもりなのか?」~~

~~「荷物の仕度を整えながら、かなり唐突に雄輝が言い出し、パン!と派手な音をたてて真里砂の平手打ちがとんだ。「ひえ〜」鋭が絶句して皮包みを取り落とす。」~~

~~「バツカみたい、何を考えてるのよ雄輝? わたしがママやパパや、朝日ヶ森の仲間たちと離れられると思って?! わたしは地球へ帰る方法を探す為に旅に出るんだわ。」~~

3日後...村の青年達が領主の館へ毛皮収穫物を届けに行くというのと共に村の青年達と共に、真里砂たち3人は山合いの村をあとにした。

(続々・没原稿)

(続々・没原稿)

3日目の朝だった。

『...それじゃ、行って来ますよ、お母さん』

闇の中でぼんやりと真里砂はその声を聞いていた。夢現つの状態。

『ああ気をつけてお行。領主さまによろしく』

『今年は鬼王のおかげで狩の獲物が減った。貯えをわけていただいて警護の者もよこしてもらわない事にはとても安心して冬を越せない。』

『大丈夫。根雪が降りるまでには戻って来ます』

『今年は寒さも厳しそうじゃ...』

深い昏睡状態から、真里砂はゆっくりゆっくり、明るみに向って浮かび上がって行く。

まわりの声はただ頭の中へ流れ込んで来るだけで、それに反応する動きは、まだない。

『時にあのティクテルミリサイもやはり連れて行くのかね』

『ええ。やはりこの村に置いておく訳にはいかないと思います。もし鬼王と結託している者だとしたら...。内部から手引きする者が現れたら、この村は終しまいですから』

『そうだな...やはり領主さまにおまかせした方が賢明だろうな』

『でもあの少年（ミリス・アイ）たち...悪い子には見えないけどねえ...』

→『この少女（マリユシュカン）は？』

『体が元通りになるまでは置いといてやりましょうよ。地球人（ティクト）の服装（なり）でこんな短い髪をして、何やら事情もありそうだし...』

『それだと冬の間中ここにとどめる事になるが、女（め）の長（おさ）よ』

『構いませんよ。男（お）の長（おさ）も承知です』

「じゃ、これで本当に」「ああ...気をつけてな」

ようやく真里砂の周囲に、現実世界が戻って来た。

炉の火が燃え、部屋の中には湯気が気持ちよく漂っている。冷たい風が一寸吹き込み、薄暗い外へ出て行く若い男の後ろ姿を見せて、扉はすぐに閉った。

表で馬のいななきと男達の声がする。

不意に。

彼らの会話の余韻が真里砂の頭の中で意味のあるものとして組み立てられ、彼女は気づいた村人の制止も聞かずに飛び跳ね起きた。

まだクラクラする額を手の甲で抑えて、左の手で胸元をつかむようにしながら、必死で考えをまとめようとする。

ティクテルミリサイ...地球人の少年たち（ティクト・エル・ミリス・アイ）。

雄輝と鋭だわ。

あの2人をどこへ連れて行くんですって？！

外では出発の合い図がかかり、数頭の馬の歩み出すひずめの音がする。何を考えている暇（いとま）もなしに、真里砂は一連の流れのような動き方で寝台の上からそろえた両脚を降ろし、部屋の中央を突っ切って、からまる寝着の裾をからげ取るように手で押さえながら、今にも小雪の降りそうな曇天の下（もと）へ走り出た。

「待って！待っ...」

ここで真里砂はがくりと膝を突いて倒れ伏してしまった。急いで上体を起こす。

熱は完全にひいているようだが、体に力が入らない。

「マーシャ!!」

2人の少年が異口同音に叫び、と同時に雄輝の方は、巧みに脚の力だけを使ってくるりと馬首を翻（ひるが）えさせた。

確か、馬術大会少年の部で優勝した事があつたはずである。

腕は後ろ手に縛り上げられてしまっているので、降りて真里砂を助け起こす事ができない。

鋭が、これは落馬防止に頼んで結びつけてもらった鎧の縄をほどいているうちに、先程真里砂が夢現に聞いていた声の主の人、村長（むらおさ）の息子が、先頭の馬から飛び降りて来て、彼女をまるで子供でも扱うように抱き上げた。

咄嗟に真里砂はその頬をひっぱたき、侮辱を受けたじゃじゃ馬姫さながらにすんと地面に降り立っている。

黒い地面の上の白い小さな素足が、溪流に跳ねる魚のようだ。

「この2人をどうするつもりなの！」

たっぷり頭3つ分は上背のある青年に向って、まだ小娘の域にも達していない真里砂が高飛車に叫ぶ。その姿が頬笑ましくは見えなかったのは、彼女がまるで巢を守る小鳥の母親でもあるかのように必死で闘う覚悟つもりである事が誰の目にも明らかに映ったせいである。とまどった青年が曖昧に笑い、

「わたしの友達をどこへ連れて行く気？」 真里砂はもう一度畳み掛ける。

完全な卵型の顔の、短く刈りつめた緑の髪に縁どられて、怒りに淡く上気したなめらかな頬。

くっきりと筋が浮かび上がりさえする象牙色の首は誇り高く伸ばされて、昂然と持たげられた細い顎がその硬い輪郭を際立たせてつんと前に突き出している。

—雄輝に打たれた縄目を見た瞬間に大きく見開かれたままの黒目のかった瞳は、目の前の青年を睨みつけながら口惜しきにうるみ、形の良い赤い唇はきゅっと引き結ばれていた。

形の良い赤い唇はきゅっと引き結ばれていて、更に何よりも印象的なのは、雄輝に打たれた縄目を見た瞬間から大きく見開かれたまま口惜しさにうるんでいる、目の前の青年を睨みつける殆ど黒に見える程の大きな暗緑色の瞳だった。

彼女があと5つも年長であれば、“火星”シリーズのデジャーソリスを思わせる表情である。

対峙する恰好の青年と村の仲間たちの間から、10年後の姿でも思い描いたのか、ほうとくすかに嘆息する声が聞こえた。

「な、言った通りだったろう？ヨリモ」 一行の中では一番のお調子者らしい若者が青年に言う。

「このお嬢さんは上臈だぜ...いや、失礼。姫宮かな」

「どうでもいいでしょう、そんな事！それより...」

聞かれた所で答えようのない真里砂は怒って睨みつけ、

「やれやれ癪の強い」で、つかつかと歩み寄って行ってもう一発、ひっぱたいた。

その頃には下馬する事に成功していた鋭が引き止めようとするのも間に合わない。

彼らが立っているのは家並に囲まれたちょっとした広場か、村の大通りの特に広がっている所かで、良く踏み固められて凍てついた黒土の上である。

村人達はこの寒空にそれでも畑へ出て行ったのか、騒ぎを聞きつけて家から顔を出したのは先程真里砂が目を覚ました時に部屋の中に居た人たちばかりだった。

「どうしたのだ一体...」「お嬢ちゃん、熱がひいたばかりで外へ飛び出すなぞ...」「落ち着いてくれ、お嬢ちゃん」「...ちょい、マーシャ...っ！」

何人かが気忙しく一斉に話したのを抑えて、さらに大声で怒鳴ったのは雄輝だった。

「どうでもいいが、まず俺の縄をほどいてくれ！」「鋭っ！雄輝の手...！」

鋭が慌ててそっちの方へ駆け寄るのを確認して、真里砂は、おもむろに村長（むらおさ）夫妻の方へ向き直った。

裸足に薄い寝巻きのまま、すっくと立って胸をそらし、両手は軽く前に組んで細い腰の前に落ち着けている。

「...助けていただいたのに失礼な真似をしてすみません。でも寝ながら聞こえてしまったんですけど、わたしの友達をわたしから引き離して領首様の所へ連れて行くと言うのは、どういう事なんですか？わたしが意識を失っている間にこの2人が何か悪い事でもしたんでしょうか」

12歳の少女が口にするにしては、ちょっとなめらかに過ぎるくらいの口上だ。鋭に縄をほどかれて直ぐにもひと暴れしてやろうと前に進み出てきた雄輝が、彼女の話すダレムアス語はさっぱり解らないながらも、この場はまかせてみようという気になって足を止めた。

「しかしお嬢ちゃん...お嬢ちゃん。この2人は信用がおけない。鬼王と結託しているようなら我々の村は終しまいだ」

まだ彼女の言う事が良く呑み込めていないらしい青年が脇から口をはさみ、今は女の長（おさ）と呼ばれていた方の老婦人に焦点を当てて話している真里砂は、

「鬼王と言うのが誰<s>なの</s>だか知りませんが」

この2人とは兄弟同然の親友なんです。と真直ぐに視線を合わせながら続ける。

聞いていた村人たちは一斉にざわめいた。

「おい、ヨリモ！聞いたかい...どういう事なんだ？」

「長よ、どうします...？ この少女はティクテルミリサイを信用しているようだが」

「いや、解らないですよ、存外この娘（こ）だっただまされてるだけかもしれない」

「いやしかし...」

彼らが急いで話をまとめようとしているのを見ると、どうやら雄輝たちを連れて出ようとしていた連中は今日中に発たなければならないようだ。最後にやはり少年2人を村にとどめておくわけにはいかないと結論づけたのを聞いて、真里砂はきゅっと唇をかみしめた。「解りました。それでは...」

「わたしも、一緒に行きます。」

彼女の決心を変える事はできないと村人が納得し、真里砂が女の長の手で、亡くなった娘さんのものだという暖い衣服を着せてもらって馬上の人となったのは、それから小一時間程しての事だった。

彼女用に用意された馬はごく大人しそうな灰色の牝馬で、おまけに女鞍が付けてあり、おかげで少し長すぎる裳をたくし上げるようにして横座りに乗らなければならない。あまりに馬が御しにくいもので、彼女はとうとうらくだ乗りよろしく片方の膝をあぐらにして座ってしまった。

途中で熱がぶり返すようなら使うようにと言って、女の長が毛皮と毛布を一枚ずつよけいに積んでくれる。鞍袋に薬草と食糧、それに真里砂がダレムアスに連れて来られたあの最初の日に、翼人の少年から渡されたあの背囊を受けとってしまうと、もう一行の出発を後らせる理由は何も無いのだ。

真里砂は、自分の成人さいた息子よりも彼女の方に気をつけてを繰り返す女の長を見ているうちに、亡くなったという娘さんの替わりに一冬だけでも一緒にいてあげたいようにも感じたが、村人たちと言葉の通じていない雄輝と鋭から離れてしまうなど考えられなかったし、老婦人の優しい年老いた面ざしを見てより強く思い出されるのは、血のつながらない娘と息子たちの行方不明で夜も眠れない程心配しているであろう、大事な養母(ママ)の事なのだった。

馬7頭、驢馬4頭に村の青年4人の行列の、丁度真ん中にはさまれた馬にゆられながら、村を出てからしばらくの間、真里砂たちは自分たちの立場が一体どういうものなのかと、あとの2人とてんでに意見を出し合っていた。が結局のところ、解ったのは、「捕虜か、囚人か、罪人かのどれかだわね」という事だけだったである。上ろうと見なしている真里砂に遠慮してか監視の青年は雄輝にあえて再び縄をかけようとはしなかったし、彼らが理解できない言葉でしゃべっていても別に邪馬だてしようとはしなかった。

「罪人、てこたないだろう？俺たち何もしちゃいないんだぜ」雄輝が言う。

「どうだか。あのヨリモとか言う人の包帯はあなただって聞いたわよ」と、ようやく慣れてきた横座りの鞍の上から真里砂。鋭がそれを聞いてあぶなっかしげに笑う。

ブルジョアばかりの私立学園で育った雄輝と真里砂は、いずれも体育正科で乗馬も抜群の成績を納めているが、鋭にしてみれば初めてである。それに気がついた真里砂たちは、しばらくの間こつを教えるのに時間を費やした。

~~一辺りの地形は山にはさまれた狭い盆地というところで、わりあい平らな、さして広くもなく耕地の続く中を、振り返ると昨日(さきおととい)のあの森の縁と30m程の高さの草地のスロープが見える。~~

~~右手にはその森の続きらしい茶色の帯、左手少し離れた所からは山地が急に始まっている。~~

~~道は凍れた赤土の道で、冬枯れの畑の申をわずかづつ右に向かう曲線を描きながら続いて行き、
雑木林を一つ抜けた所で、村の姿が見えなくなった。~~

~~そこから、冬の訪れを告げる灰色の空の下に、左手の山地が迫るように近づいて来て、道はそれ
まで沿っていた3m幅程の川から離れ、低い土手状の所をしばらく登りつめて右手の森の申へと
通じている。~~

~~そこまで来るのに時間は3時間程だったろうか。真里砂は最後に馬を~~

I Qの高さが段違いなだけあって、さすがに鋭は飲み込みも速いし、一度習ったことを慌てて忘れるようなヘマでもない。反射神経も結構悪くはないらしくて、3時間もたつ頃には並足で大抵の動作はできるようになっていた。

「すごいわ鋭。雄輝なんか落ちずに乗っていられるようになるまでで3日もかかったのよ」

真里砂が手離しで言うのを雄輝が反論して、

「おい、そりゃないだろ！いきなり西部劇みたいな乗り方しようとしたんであんなただけで...」

誉められて得意そうに頬を赤くしながらはにかんだように大大七く微笑っていた鋭がそれを聞いてくすりとなり、話の接ぎ穂に、何の気なく真里砂が乗れるようになるまではどのくらいかかったかと聞く。

真里砂が不意に笑顔をひっこめておし黙り、雄輝が思い当たったように手綱を引いてばったり立ち止まってしまった。

「...?! ねえ、どうしたのサ？」

結構手慣れて来たように自分も馬を止めていぶかしげな顔をする彼に、真里砂はしかたなく、視線をそらすようにうつむきながら答えた。

「あの...ね、あの、...わたしは、なぜか最初っから乗れたの、よね。」

これには鋭も面喰(くら)ったようだったが、「ふ、...ふ～ん。」 真里砂が嫌だろうと思っ
てか、それきり口をつぐむ。前に行く青年が何か言いそうに振り向いたので、3人はまた無言のまま馬の歩を進ませだした。

空はあいかわらずの灰色で、少しづつ明るさを増しているところを見れば今はまだ午前中らしいのだが、東西南北の区別はいくら見渡してみてもつかない。

この辺りは山地と台地にはさまれた割合に平らな谷間(裂谷)のような所で、一行が進んでいるのはその開けている方向。は川に沿って下の方へ進んでいる。左手の1kmくらい離れた所から急に立ち上がっている山々はまるで毛ば立ってでもいるように冬枯れの枝をびっしり埋め込んであり、好対照をなして右手の森は秘密を隠し持つ思い緑色。...そこに続く急傾斜の草地は無視して、木々の群は台地の上り鼻から始まっているのである。

明らかに3人が迷い出してきたあの森の続きである事は確かだった。

その間の土地は一行のたどっている道と一本の川をはさんで区画の行き届いた耕地が広がっており、作物ももう殆ど残ってなくて、畑に出手いる人間の数も予想に反して、見渡す限りで数える程しかいない。

してみると、あの村の人々は一体どこに行っているのだろうか。畑の数ヶ所、山の際に近い辺りにかなりの面積で焼き払われた跡がある以外は、冬の仕度の整った後の典型的な農村風景であ

ったが、それや最初の晩に見たあの村の大きさにしてはやけに嚴重な防備、村人たちの雄輝と銳に対する警戒具合いや聞きかじった"鬼王"という言葉など、わずかな論拠を頼りに銳が推論して見せて、あの村はどこかよその所と戦争中なんじゃないかなあと不安を漏らすと、真里砂はそれを聞いてさっと顔を曇らせ、雄輝は逆にさも面白そうに指の骨を打ち鳴らして残る2人から睨めつけられた。

途中から風花が舞い始める。

2016年1月29日 リステラス星圏史略 (創作)

3. 森の中で ... コミュニケーション

1回目の小休止を過ぎた辺りから周囲の畑地は女に観えて減り始め、2回目から遅い昼食と時間が経つ頃には、馬や驢馬、他の家畜などの夏の間の放牧地らしい場所を通り抜けて、一行は谷がくびれ込んで左手の山が断崖状にせり出している、なんとはなしに重苦しい感じのする荒れ野原を横切っていた。

川床が徐々に変化し始めたと思うと、1つ蛇行した所から穏やかだったのが急に湧きかえる大岩小岩の溪流に変わり、

「中津溪谷を殺風景にしたみたい」だと鋭が言う。

道はそれから大きく右に曲がって急階段のような土手状の所を苦労してよじ登り、登りつめた所で馬の手綱を引いて後ろを振り返って見れば、そこはちょうど3日前の晩に真里砂が気絶して転げ落ちた、その同じ傾斜地（スロープ）の終る所なのだった。

薄暗い森の中に入る。

一昨日の雪がまだあちこちの枝影に半ば溶けかかって残っているが、樹の間を縫って続く赤土の道はさしてぬかるんでもいない。

地面はやがて黒土に変わり、しばらくの間あたりさわりのない話ばかりしていた3人もあたりの底深い静けさに気押されて黙りこくってしまった。

空っぽだから静かなのではない、真綿のような「何か」があたりに満ちているから、何を話してもすっぱり反響せずに吸いとられてしまうのだ。

鋭はどうもあたりに気配を感じるような気がして辺りを落ちつきなく見回してみる。

雄輝は気に入らなげに鼻を動めかしていたが、そのうち通り過ぎ様に何気ない動作で太い枝を一本折り取った。

一行の中では真里砂だけが怖れ気もなく...いやむしろ森と同化しているように、緑色の沼のまうな不可思議な静けさをたたえて馬を進めている。

森は、どんな所であろうとも、ある種の母親のような存在で、彼女にとってはごく自然な場所なのである。横座りしている灰色の乗馬が森の光線の中では沈んだように見え、全身をくすんだ青色のすっぽりした外套でくるんで頭巾からわずかに白い顔をのぞかせているだけの緑の短い髪をした少女。

小暗い樹間の小経の中では、むしろその周囲にミルク色の霧状に光を発しているようにさえ見える。

真里砂は、先刻から、雄輝と鋭、2人の地球の少年（ティカーセル・ミリス）を落ち着かなくしているものと村の青年達が緊張する理由とのそれが別ものであるのに気がついていた。

雄輝と鋭は単に古い森に特有の重々しさに気を飲まれてしまっているだけだが、青年たちは違う。明らかに何かを用心緊張し、無言のうちに弓を携えなおしたりして警戒すらしているようだ。

それは真里砂たち子犬が脱走するとか森の獣が襲って来るとか言う単純な事件をではなく、彼らがもっと恐い事態を危惧している事を示している。

（恐い事？）

なんなのだろうと真里砂は考えた。先程、鋭が戦争中ではないのかとつぶやいた言葉を思い出し、身震いする。こんな所でそんな騒ぎに巻き込まれてしまうのはまっぴら願ひ下げだ。

ふと目を上げてつい振り向いてみて雄輝が棍棒代わりにする気らしい枝の葉を払っているのを見つけ、サッシュに納めてあるこれも女の長からもらって来た懐剣を外套越しに押えて考えた。こんな物騒なものを身につけるのは初めてだけど、いざとなれば自分わたしはこの使い方を知っているような気がするわ…。

気がついて、真里砂は不意に馬の歩みを止めた。

驚いて後ろの馬がぶつかりそうになるのを無理に寄せて、（狭い（道幅の中で殆ど）鋭の鎧が自分の馬の脇腹に当たる程にして隣り合わせる。

「何?! マーシャ」

自分の方でも考え事にふけていた鋭が、不意に真里砂の真摯な視線に捕えられて、驚き慌ててといった恰好で聞き返したの、それでも結構手慣れてきた手綱さばきで、馬を抑えながら聞き返した。

真里砂はさらに身を乗り出して鋭の方に顔を寄せる。声と、ともすれば早鐘のようになりそうな心臓を極力抑えた。

裏腹に顔は蒼ざめひきつってさえいる事がはっきり自覚できる。

「ねえ鋭、あなた...熱を出しているうちにわたしがもう一度記憶を失うのじゃないかと心配したって言ってたわね」

「え、うん。」

自分が考えていたのも丁度その事だった鋭はまだややうろたえながら、質問された時のいつものくせで、銀ぶちの眼鏡を押しあげて肯く。

「なぜそう思ったの？」

真里砂ののぞきこむような熱っぽい光を帯びた黒緑色の瞳を見て、彼はかえって落ちついたようだった。

「根拠ナシ。ただの勘。...非化学的にも。」肩をすくめる。

今のいかにも鋭らしい一言に真里砂はかすかに失笑させられながら肯づいて、

「でしょうね。でも、あなたの勘はいつも正確だわ。これまで1ヶ月半のつき合いで見ると殆ど私と同じくらいだし、特に人の心の動きに関しては、凄い観察力じゃない？」

「...でも今回は、はずれた」

そうそう大人しい筈のない鋭が、いきなり誉められて、珍しくはにかんだ笑い方で答える。と、自分の馬の方に重心を戻してしばらく考え込みながら、ぽつりと真里砂が言った。

「...あながち...、まるっきり、外れたというわけでも無さそうよ...」

「え！...」

鋭が反射的に声を上げてから真里砂の言葉を頭の中にしみわたらせるまでには、数秒間程にもなる空白状態を間に置かなければならなかった。「なに、何...どう言う事？」

真里砂はいつもの能弁にも関わらず、ぽつり、ぽつりとしか言葉を並べる事ができない。

「...つまり...逆なのよ。忘れ、る、かわりに...何だか少しずつ思い出して来そうな気が...するの」

一層表情の固くなった真里砂に反して、鋭の方は、みるみるうちに表情がほぐれたようだった。

「なあんだ、そういう事か」鋭はほっとしたというか拍子抜けした声を出し、真里砂の方を怪訝にさせた。「え？」「あ、...なんでもない、ない」

「ね、どうなのかしら、そう言う事ってあるの？ あなた科学的なこういう事って得意でしょ」

「んな事言たって精神病理学なんて専門外だよ...だけど」鋭はしばらく考えこんで、

「うん。あり得ると思うよ、十分。大体マーシャってば今まで何一つ思い出さなかったっていうのがちょっと珍しいケースなんだからさ。そうだとすると、多分、熱出したのが原因って言うよりは、記憶を失った時と丁度似たような情態になったから、だろうけど」「そう」

真里砂はほっとして、少し笑った。~~「馬鹿みたい。わたしちょっとびくびくしすぎてたわね。ありがと、鋭。」~~軽くかかとをあてて乗馬の位置を元に戻す。明るく笑った。鋭がその表情を見て、どういうわけだかまぶしくってしょうがなくなった事などには気づかない。一声自分の臆病さ加減を笑い飛ばして、言った。

「そうよね。馬鹿みたいだわ。忘れたものはいずれ思い出すのがあたりまえなのよね。わたしったらちょっとびくびくし過ぎなんだわ。...ありがと、鋭。」

...それからしばらく...約丸一日の間...真里砂は村の青年たちとなんとか接触を持とうとじりじりして過した。皮肉な話だが、彼女の話しかけなければという思いが時が立つにつれて増せば増す程、青年たちは寡黙になる一方で、取りつくしまもない。今は、地球から来た3人にも自分達が危険地帯のまっただ中にいるのだという事が肌で感じられた。

道は途中から大きく湾曲して、深く細い溪谷...どうやら最初の日あの谷川のように...に掛けられた見るも恐ろしげな吊り橋をかるうじて渡り、と、そこはどうやらあの断崖の続きそこからはがらりと樹相が変化して、一層殺ばつとした雰囲気雑木林に入る。ガレ石の多く転がる登り坂は騎乗ではひどく困難だった。

今はもう一行の全員が、無言のうちに手に手に獲物をたずさえて進んでいる。青年たちは雄輝と鋭の方を...いざとなったら敵側に回るのはなかろうかと...いう眼つきでしばらく凝視してい

たが、真里砂のひとにらみで武器をとり上げるのはあきらめたらしい。ただ、何か危険があった場合には、上臈と見なされている真里砂以外は援護してもらえないだろう、と三人の意見は一致した。—ということで3人の意見は一致したのだった。

「ねえ、何が起るって言うんだろう？」と鋭、

「知るものですか。山賊か、人喰い狼か、とにかくろくなものである筈がないのよ」

5分に1ペんの割り合いでなんとか青年たちに話しかけようとはかない努力を試みては黙殺され続けている真里砂は不機嫌の極地だ。

「畜生め」 3人の先頭で所在なげにこん棒を振り回しながら、いろいろな意味をこめて呟いた。
。...

3人とも、何か奇妙な程の焦りといら立ちを感じていた。真里砂は病み上がりで、雄輝と鋭は2日間監禁されていた時の不眠と絶食のせいで、やはり体調が少しく狂っている。昨夜は夜営しながらも、危険からなのか火をたくことすらできず、食事の量は...食糧袋がおのおののくらに結えてはあっても勝手に好きなだけ食べて良いという事ではないらしく...少ない。おまけにあたりを押し包むような静けさといったら、自分たちの話し声ですら殷々と響いて行ってしまいそうで、いつの間にか3人ともがひそひそ声で会話しているような調子だったのだ。むしろ、気がめいって怒りやすくないようだったら、その方が不思議だっただろう。3人とも何とか自分の癩癩不機嫌憂うつを抑えるのが精一杯という有様だった。

雪と風花が交互に降ったり止んだり、灰色の曇天は動く気配を見せようとしめない。気温はせいぜい5度ぐらいだったのだろうか。風の無いのが不幸中の幸いといった感じの、ともすれば手綱を取る手の感覚が鈍くなって行くような「涼しさ」...だと雄輝が皮肉った...である。途中で景気づけに、思いついたように自分の祖父や曾祖母の、零下何十度という冬の満州の"引き上げ"の話をしやべり始めたが、これはすぐさまに真里砂と鋭の不機嫌なうなり声で黙らされてしまった。

「とにかく」と真里砂がつっけんどんに言い、鋭が「これ以上寒い所の事なんて考えたくないね！」

雄輝がついかっとして喰ってかかりそうになるのを何とか懸命に抑えているのを見て、鋭が慌てて口をはさんだ。

(※未完※)

(また別?の没原稿) (たぶん小学6年?)

(また別?の没原稿) (たぶん小学6年?)

2016年1月29日 リステラス星圏史略 (創作)

ブン...と低くうなる音。ブツッ。鈍い音をたてて何かが何かにつきささる。ふっ...と、最後のおきの光が消えた。

真暗闇の中で鋭がバツとはね起きると真里砂が指で雄輝をつつき起すのがほぼ同時だった。

「なん...何が起ったんだい?マーシャ」小声で鋭がたずねようとするので、真里砂はす速く手を伸べて口をふさぐ。鋭は初めふざけているのかと思い、真里砂の指さきがもう一度自分の腕を再び叩き始めるのを感じて納得した。解ったモールス信号である。

「馬鹿ね!」口癖が出た。

「声を立てないで。何が起ったのかわたしにも解らない。この森は眠ってしまっていてわたしには不親切だわ。ただ、数十人...そうね、35~6人くらいがかなり大勢の"何か"がぐるりを取り囲むようにしてこっちを見てる。...味方でないのは確か。わたしの荷物は何処? ヨリモを探して、彼とはぐれないようにしましょう」

両手を使って二人に同時に言葉を伝えると、雄輝から荷物を受け取った真里砂は手さぐりで進み始めた。ヨリモは、火の一番そばで眠っていた筈。一番外側を右隣で四つばいになっていた雄輝がベタリ、と何かに手をつっこむ。「うわ、」とか何とか叫びそうなのをかろうじて飲み込んで、「血だ」と真里砂に打信してよこした。それを左に伝えると、その指先に鋭の身ぶるいするのを感じられる。

「馬鹿ね!!」 鋭が痛がるくらい強く叩く。

確か、最後に寝返りを売った時に見張が寄りかかっていた樹がこの辺りだった...真里砂自身も震え出しているのだが、緊張のあまり自分では気づいていない。

「ヨリモ!」 危険をおかして低い声で呼ぶ。

「マーシャか」

ほっとしたような声あまり近くで聞こえたもので、真里砂たちの心臓は一瞬飛び上がらんばかりだった。と...

闇を引きさく音が七でと共に数本の矢が射かけられて来た。

「ヒエッ!」一本が危うく鋭の腕をつらぬきそうになる。

「気をつけろ。奴らは夜目が利く」とヨリモ。この場の状況が飲み込めていない以上、真里砂としては主導権をあげわたすしかなかった。

「マル、エンデ、クロウ、この3人を護れ。」

(未完)

(地球から異世界へ) 「序章」

(地球から異世界へ)

「序章」

2007年6月26日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

- 一、
- 二、序章
- 三、

一、

隣室から聞こえて来るかすかなせわしない物音に、清峰鋭（きよみねえい）はふっと浅い眠りを起こされた。

耳をそばだてて静かに息を殺して壁に耳を当ててみる。

が、用心して室内ばきを脱いでいるのか、聞きわけられるのは物の上げ下ろしや戸棚の開閉の音。それに開け放してるらしい窓が風でかすかにきしんでいる音が混ざる。

——どうやら今夜決行する気らしい。

気づいて鋭はわけも知らぬわからぬままに背筋を何かが走るのを覚えた。ゾクッとなった。なにか、自分と、自分たち三人の一生を左右するような、とてつもない事件が起こりそうな気始まるんじゃないか——!?

予感が身内を走り抜けたのだ。

マーシャは、彼女は、この間からいったい何を考えてるんだ。

いやそれより、これからどうしようとしているのだろうか？

鋭はぐずぐずしている暇がないのを思い出してベッド寝台の上に体を起こした。

振り向いて、反対隣のベッドに寝ている雄輝（ゆうき）の背中をつつく。

トン。トントントン。

雄輝の方で指定した約束の合図である。

——就寝時間から午前一時までは雄輝俺が不寝番をする。それから朝までは勤が非常にいい鋭の方が、何か起きればすぐに目をさます覚悟で壁際のベッドに移る。で仮眠するしてろ……。

しかし一向に目をさます気配がないので、

鋭はもう一度雄輝を突つこうと腕を伸ばした。かどうしようかとためらった。一旦伸ばしかけた指をまた止めた。

これで気がつかないようならお手上げだ。

下手にゆすったりして寝ぼけ声をたてられたら、鋭同様五感の発達したマーシャ＝真里砂（まりさ）には、様子をうかがっていた事がすぐにばれてしまうだろう。

ゴソリ。

鋭の指が動きかけた丁度その時、雄輝の体のごく自然に寝返りを打った。

両目を開け、既に目を覚まし、その顔は驚いた事に一片の眠気の陰すら形跡を見せない。すらない。

「——どうした。何かあったのか」

風声帯をまったく使わず、口唇だけ動かして雄輝が尋ねた。世に言う読唇術という奴である。鋭がまだこの方法に慣れていないのを知っているので極くゆっくり唇を動かした。

「マーシャが今夜決行する気らしい。——だけど、なにを、だろう？」

「——さあ、な。」

真里砂とは6年越しのつきあいの、幼な慣じみ幼馴染みで、かつ一人っ娘の彼女の兄貴変わりでもある雄輝は、鋭ほどさほど不安を感じていないのか、きつて鋭ほど深刻な顔はしていない。

ヒョイ、とかがみこんで、ベッドの足元からかねて用意のリュックサックを持ち上げた。

<行くぞ。非常階段用のはしごから先回りしてどっちへ行く気か確かめよう>

鋭もうなずいて彼に続いた。



朝日ヶ森の森のはずれにある有澄夫妻の別荘には、現在子供たちが三人だけで暮らしている。国家間の情勢変化の激しい時節に、外交官である有澄氏は、2週以上の休暇を取ることができなかったのだ。

~~が、愛娘の真里砂／子供たち三人に全幅の信頼を置いている夫妻は少々の不安も持ちはず、夏期休暇に入ると同時に帰って来た真里砂と、後見役を引き受けている三人の少年——親友夫妻の遺児・翼雄輝（つばさゆうき）と、縁あって三月前に戸籍上の息子となった清峰鋭（きよみねえい）——を引き連れてこの夏期休暇に入ると同時に寄宿舎から帰って来たところを出迎えて、そろって別荘へやって来ると、10日間のサマータイム——を存分に楽しんだ後には自分たちだけでさっさと二人だけで引き上げて行ってしまった！~~

~~そこで——歳上の雄輝と、同い年・12歳の真里砂と鋭の名物三人組は、そこで残された三人——愛娘の有澄真里砂と、有澄氏の親友夫妻の遺児で、13になった翼雄輝。それに真里砂と同じ12歳の、縁あって二月前に引き取られた混血孤児の清峰鋭——毎日毎日釣りに行ったり急流でスリルのある泳ぎを楽しんだり。有澄夫人の素晴らしい蔵書類に手当たり次第に読みふけったり、気が向けば自転車で半日かけてふもとの街まで本を仕入れに出かけもした。~~

~~決して放縦怠惰にはなり得ない、真実自由で躍動的な、素晴らしい夏休みに毎日を送っていたのである。~~

しかし、一見気ままに思える日々の裏側では、潮が満ちるようになっていくのと同じ秘やかさで、確実に何か動き始まりつつあった。そして、その『何か』の中心にいるのは真里砂であり、おぼろげながらもそれを理解できていたのも、やはり彼女自身だけであった。

「……やっぱり森の奥に向かったな。」

真里砂が姿を消した方角——北——を見つめながら雄輝がつぶやいた。

「え、じゃあ雄輝にはマーシャがどこへ行こうとしているか見当ついているのかい？」

「うん？——いや。具体的などこにつってのは俺にもわからない。それより受信追跡器の調子はどうかだ」

「感度は良好。だけど短時間で作ったシロモノだから持続性の方は保証できないよ。——おまけに距離もわからないと来てる。」

科学狂のIQ400鋭になら、もっともっといくらでも立派な受信機装置を作ることができたのである。——ただ、雄輝が時間さえ十分にくれていれば。

だが、一度制作にとりかかったら最後、外界俗世のことなど一切忘れて没頭してしまう、根っからの気違い博士（マッドサイエンティスト）タイプの鋭よりも、はるかに実際的にできている雄輝は、鋭の不平など気にも止めなかった。——には耳も貸さなかった。

「どっちみち距離なんぞ問題にならないさ。あいつがこの森の中に踏み入ったら、まず足の速い野生動物でない限り追いつけない。それよりマーシャが見えなくなってから5分経った。出発するぞ」

「ちえっ！」

鋭は大げさに舌打ちして、受信器を右手に持ち変えた。

古懐中電灯の筒を容器に利用してあるそれは、ある一定の方向に筒先がぶつかると、小さくチカチカ、と明滅する。

別荘の北側へまっすぐ進むと、まだしばらくは温帯性落葉樹の混じる雑木林が続く。十五、六分も歩くと、川が東から南へ直角に曲がっているところにぶつかった。

~~幅約5m。深さは流れが激しく渦まいているので計測不能。~~

登山用地図にも名前は載らない川だが、土地の昔話（むかしがたり）伝承によれば銀白青川（ぎんびやくせいかわ）。またの名を物忘（ものわする）川とも言う、様々な伝説のある不思議な川である。この川はこの急な曲がりを経て、大きく屈曲し、別荘のすぐ西をとうとうと流れてゆくのである。

鋭と雄輝は黙々として、川曲がりのすぐ上手にあるつり橋を渡った。

川の対岸よりいよいよ本格的な大森林が始まるのだ。月に照らされた木々のこずえが、くっきりと天蓋に浮き上がっている。

~~奥の沼へ三日と開けずに釣りに出かけているのだから、それでもこのあたりはまだ下枝をほらった簡単な道がついているし、かなり物慣れた場所と言ってもまいのだが、よく、下枝をほらただけの簡単な道もついている。それでも月の明るさの谷間の闇にはさまれたが、闇に沈みがちな森の細道を二人きりでたどってゆくのは、やはりかなり頬がこわぼる所業だった。気力があることだった。~~

「なあ」

~~奥の沼の脇を通り抜ける時、森のふちのところで川を振り返って、雄輝が精一杯冗談めかした口調で言った。~~

「ここへ夜来るのはなにも初めてってわけじゃないが……、今夜は特に水魔でも出そうな雰囲気じゃないか？」

鋭は『水魔』という言葉~~を聞くと、頬をこわぼらせて右手の沼地にちらっといたとたん、びくっ~~となつて後ろに視線を走らせた。

~~雄輝が言うとうり、不気味なほどに青白い月の光に照らされて、を反射して、川は妖しい輝きを放っている。~~

「非科学的だね」

視線を無理にそらしてそちらの方を見ないようにしながら、鋭は精一杯の虚勢を保とうとした。

「立ち止まってないで早く行こう。マーシャの発信器が有効圏外に出てっちゃ……」

バシャリ！ と水のはねる音。

雄輝は瞬間的に飛びすさり、鋭はとっさに振り向こうとして、二人ともバランスを失ってひっくりかえってしまった。

しかし、それは単に魚が一匹はねただけの音だったのである。

その事に気がつきづき、お互いに相手も恐ろしがっているのだという事実を知った時、二人は怖さも忘れて顔を見合わせたまま、思わず知らずのうちに声をあげて笑いだした。

「なんだ、雄輝も怖がってたのか」

「コンピューターでも暗闇は恐しいってわけか。ええ、おい」

あはははは.....。

笑い声が闇を、どんなサーチライトよりも鋭く切り裂いてしまった。

——二、序章

——「ねえ雄輝、気がついたかい」

森の中へわけ入ってしばらくしてから、沈黙を破って鋭が話しかけた。

「あん？」

先に立っていた雄輝が軽く振り向く。

「この道.....多分マーシャがつけた道だね。」

——鋭の言う通り、三人は今道を歩いていた。

道なき道を歩く覚悟で森境のやぶに氏を踏み

(未完☆)

コメント



りす

2007年6月27日2:02

(この稿コクヨの400字詰め原稿用紙にシャーペン書き。)

改訂事項リストアップ

◎「赤い月と黒の山」風にさりげない巧みな書き出しを考えること。

◎真里砂を、もっと真里砂らしく描く事。

12歳

序章

「ねえ」

森の中の道なき道を四苦八苦わけ進みながら鋭が言い出した。

「転入して来て以来、君らとはずっとわけのわからない事にでも付き合っているけどさ、事がここまで来た以上……自分が何のためにこんな真似やってるかくらい教えてよ。」

ん？ という風に雄輝が軽く振り向いたのが、暗闇の中でもなぜか鋭にははっきりわかった。雄輝は先に立ってガサゴソ木々の下枝を押し分けながら、しばらく何かに考えを巡らしているようだった。

「う……ん、そうだな。もう話してもいい頃だ。

——真里砂の髪が緑色だって事は知ってるんだな？」

……「うん。転入して一月たった頃に本人から聞いた。」

やっぱりあれに関係する事だったのか、と鋭はうなづいた。

「その他の……たとえば奴が養女だって事なんかは？」

「いや……知らない。本当?! うそだろ？」

……「よし、それじゃ俺の知ってる限りの事は全部話してやるよ。」

雄輝は話し始めた。

× × ×

「今を去る事 丁度6年前、有澄の小母さまは結婚後4年も待ってた赤ん坊赤ちゃんを、“母体に危険”て事で中絶しなけりゃならなかったんだ。

で、それだけなら良かったんだが、その後——婦人病の一種だと思う——にかかっちゃって、子宮摘出術を受けたんだな。つまり、今後子供が産まれる望みは全くない。

小母さまは知っての通り無類の子供好きだろ？ 自分のせいで育ちかけてた子供を殺したっ、て罪の意識とあいまって、ノイローゼ通り越して半発狂状態になっちゃったんだ。

そんな時、療養に来たのが、ほら、この朝日ヶ森の別荘だ。

小父さまは大事な忙しい時期に仕事休んで半年間も付き添ってたんだぜ。

で、ある日、10月の9日ン事だな。夕方から予報にはまったくなかった大暴風雨大雷雨が始まったんだそうだ。ま、季節柄それ程不思議な事もないと思うが……。

その頃俺は丁度親父たちにくっついてヨーロッパ行ってたからその嵐の事はよく知らないんだが、ちょっと異常と言える程ものすごかったって言うな。

とにかく突発的極地的異常気象的大嵐は、丸一晚暴れまくると、次の朝にはあっさり虹まで置いて引きあげていっちゃった。

問題は、その嵐のおさまる少し前、10日未明の3時半。寝つかれずに一晩夜明かししていた小母さまとそれに付き添ってた小父さまとが、稲光の中で川からはい上がろうとしている女の子を見つけたんだ。

推定年齢6歳。見なれない奇妙な服を着て、髪の色は緑だった……。」

「それがマーシャだね？」

「……まあ聞けよ。その子供は小母さまに助け起こされるなり気を失ったそうだ。全身傷だらけで高熱をだして、三日三晩昏睡状態が続いた後、目を覚まして、ああよかった、さあ身元を聞きましょう……と思ったら、その子は日本語を話せなかった！、いや、日本語どころか、現存する地球上の言葉はどれも解らなかったんだな。

いいか？ 言語学博士号を持ってる小母さまがそう判断したんだぞ。

さあ、緑色の髪の上に言葉が通じないと来ては、うっかり警察に届け出るわけにもいかない。おまけにその子の世話を焼き始めた途端に、小母さまの精神状態がすっかり復調しちまったんだ。

小父さまとしちゃ、小母さまの情が移り過ぎた時の事を心配しながらも、どうすることもできやしないだろ？

で、人目がない森のど真中で暮らしているのを好都合と思っそうことにして、とにかくその子から事情を聞きだせるようになるまでは、手元に置いて世間には隠しとくことになったんだ。

もちろんこれがマーシャなんだが、奴は知っての通り、こと語学に関しちゃ人間離れた勘の良さを持ってる。一ヶ月でだいたい正確ななんとか日本語をマスターものにしちまった。

……まあ小母さまの教えかたが良かったせいもあるとは思いますが……。

で、一ヶ月して改めて素性を尋ねたら、何て言ったと思う。けろっとして、“記憶がない”、って言ったっていうんだ。そこのいきさつはよく知らないんだがな……。

× × ×

雄輝が口を切ってしまったので、鋭はしばらく話が再開されるのを待っていた。が、雄輝の方は勝手に物思いにふけてしまって、なかなか話が続きそうにないので、「それで？」と鋭の方からもう一度尋ねた。

「それでって？」

「記憶がないって答えて、それからどうしたのさ」

「——ああ、後は簡単な話だ。マーシャは行く所も帰る所もない。小母さまは迷い混んで来た子供を手離したくない。小父さまは彼女が明るさをとり戻すためならなんだってやったろうし、彼自身子供は欲しいしマーシャは気に入った。

となりゃ話は速いだろ？ 小父さま小母さまはマーシャを“天から降って来た”子供だと思いう事にして黒髪のかつらを作り、一ヶ月遅れてで警察に届けた後、あらためて養女としてマーシャを引きとったんだ。

幸いマーシャが“マ・リシャ”って自分の愛称覚えてたんで、あて字で有澄真里砂って名前にしてさ。」

「ふ～～ん」

「で、小父さまの任地がちょうどヨーロッパ方面に変わったんで、休暇の時なんか、よく俺たち一諸になったんだよな。その頃からあいつとは結構仲良かったんだが、三年前に親父とおふくろが殺され……と！」

雄輝は慌てて口をふさぎ、ちらと気遣わしげに鋭を見た。

鋭の方はとっさにお得意のポーカークフェイスで、しゃっと表情を押し隠す。

知りたい事を探ろうと思ったら、まず興味がない振りをするに限る。

……案の定、雄輝はひっかかった。 ほっとして再び話し始める。

「親父とおふくろが死んで、小父さまたちにひきとられたろ俺。以来三年間は毎日ほとんど一諸に過ごしてるからな、あいつの性格はだいたいわかる。

鋭、おまえマーシャの友達に対する態度見てて何か気づいた事ないか？」

「、え——…うん。おかしいと思ってたんだけどさ、“一番の親友”てのを作りたがらないみたいだね。だれとでもよく話すし、明るいし、親切だから、彼女と親友になりたがってる女の子って——男子もだけど——多いのに、マーシャはなんだか言い寄って来る連中同志をくつつけちゃう趣味でもあるみたいだ。」

「ああ。さすがに鋭だ、やっぱり気づいてたか。あいつも昔はもっと素直だったのが、2年前からあんな風になったんだ。——っても、具体的にどう変わったかは説明しないとわからないな

「か？」 「うん」

……「二年前まで、つまり奴が地球に来てから四年たつまでは、あいつはいつもものすごく素直で、記憶のない、自分の素性も覚えていない人間だとはとても思えないほど、自信に満ちてた

。小母さまに連れられて初めて大人だらけの社交場に顔を出したのが、確かあいつが8つの時だった

つけが、居並ぶ各界のお偉方相手に一步も動じる所がないんだな。ガキが無理に背伸びをしたって感じじゃなくて、ごく自然に対等に話ができるんだ。堂々たる気品というか威厳めいたものまで持って生まれてた感じでな、まるでどっかの小女王って顔ですらりと立ってるんだ。さすがの俺もいささか気押されたね。で……

そのパーティーの後で俺はマーシャに聞いたんだよ。真面に、

『おまえ本当はどっか別の世界から来た王女かなんかで、記憶がないなんてうそなんだろう』って

。そしたらなんて答えたと思う。

『わたしは本当に自分の事は何も覚えていないけれど、自分がそうなるべくして記憶を失っているのだという事はちゃんと知っているの。』って、『だからよけいな事に気をまわして、やたらあせる必要は一切ないのよ。——いつれ“時”が来れば、全ては、なるべきところへ行くはずだわ』

。自信満々な即答だぜ。すごく率直に思った通りの事をさ。

今はそんな事めったにないだろ？

無論、あの頃は進んでいくらでも友達を作ったし、他の奴から好意を示された時に適当にはぐらかして逃げちまうような真似もしなかった。」

「二年前から——？ 様子が変わったのが？」

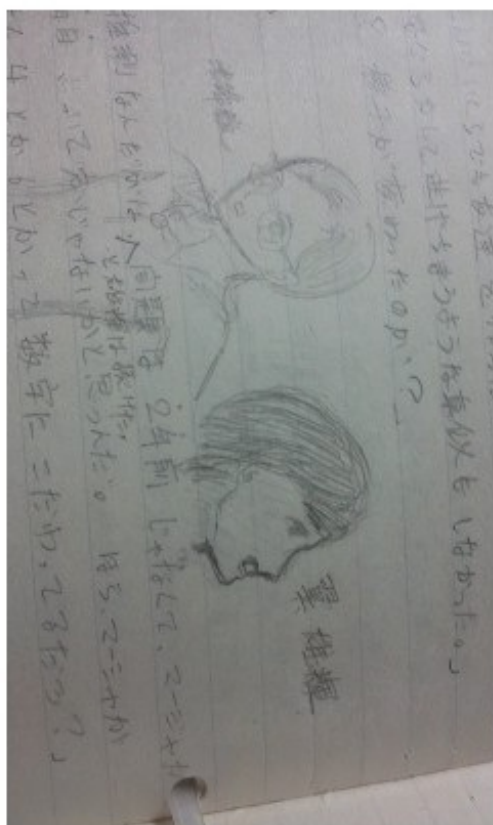
「ああ」

「何があったんだい」

「何も。」

「なんにも？……？」

(☆シャーペン描きで清峰鋭と翼雄輝の顔のイラストあり)



「これはあくまでも俺の推測なんだがな」と雄輝は続けた。「問題は2年前じゃなくて、マーシャが記憶を失ってから4年目、って方じゃないかと思うんだ。ほら、マーシャが縁起をかつぐ時、よく4とか6って数字にこだわってるだろ？」

「うん」

「思うにあいつは自分の素姓をまるっきり知らないわけじゃない。少なくとも自分がどんな所から来たかくらいは覚えてるはずだ。——たぶん、地球の上じゃあないぜ——」

なぜって奴は言葉は覚えてるんだし、記憶喪失者って普通バスに乗ったり買い物したりはできるだろ？」

たぶん、4年目がマーシャの言ってた“時”だったんだ。

ところが4年目に起きるはずだったなにかが起きなかった。

鋭。そしたらおまえどうする——？」

「原因を突きとめる」

「——だろうな。そしてマーシャが待ってたなにかってのは、多分、自分の生まれた所へ帰る事だったんだろうと思う」

「バッカバカしい。かぐや姫みたいに月からお迎えが来るってのかい？ さっきっから聞いてりゃ、まるでマーシャが人間でないみたいじゃないか。」

「じゃ、おまえ、“科学的”に考えてみて緑の髪の地球人種がいるって言うのか？」

「……う……」

「まあ俺の言う事を信じろよ。おまえは科学万能主義だから無理もないが、6年つきあって来た俺の言う事だ。」

事、奴に関する限り、何があろうと俺は驚かないね」

「やれやれ」

鋭は肩をすくめて苦笑いした。

「僕にも慣れろっていうんだね？」

「そういうこと」

二人は、同時に笑った。

「で、とにかく俺は、奴がやろうとしている事は、何とかして自力で故郷へ帰る事らしい、と信じてる。

だからこのとんでもない森の中を、夜の夜中に後つけて歩いたりしてるわけさ」

.....「でも、いったい何のためにさ雄輝.....？」

(☆シャーペン描きの雄輝の顔のイラストあり。)



× × ×

何のために、故郷へ帰ろうとしているマーシャの後をつけたりするのか、と、鋭に尋ねられて、雄輝は答える事ができなかった。ので、黙秘権を行使した。

は、はん。

鋭はその事をファイルして、頭の中の『雄輝の隠し事』の項に放り込んでおいた。これは、「親父とおふくろが殺され……」と、絶対難か関係がある、と、にらんだのだ。

あたりは真暗で、月の光が木々の枝をすかしてごくわずか漏れていた。

下やぶと下枝を押し分け払い分け、雄輝がかなり無茶をしながら夜の森の中を押し進んでゆく。

(……こいつはどうも、一つっ事ではおさまりのつかない冒険に首をつっこんじやったらしいな……)。

後について踏み倒された障害物の群れを乗り越えながら、鋭は、後悔とも好奇心ともつかぬ心地でそう考えた。

× × ×

—~~鋭のデータバンク、雄輝の項。~~

- ~~1. 「両親が殺され……」した、らしい。~~
- ~~2. 何らかの意図を持って、故郷へ帰ろう(!?)としているマーシャの後をつけている。~~
- ~~3. “何らかの意図”云々は、第一の事項と関連アリ。~~
- ~~4. 上記の事に、僕も巻き込む気らしい。~~

—~~同じく、マーシャの項。~~

- ~~1. 黒髪のかつらを常用している、緑の髪の異邦人。(?)~~
- ~~2. 出生不明。6歳以前の記憶無し。~~
- ~~3. 現在は有澄夫妻の養女である。~~
- ~~4. 雄輝の推測によると、彼女は故郷——どこだか知らないけど——へ帰りたくてあせっているらしい。~~

—~~つけたり。~~

~~—この三人のやる事には“ロボット工学三原則”に背かない限りで絶対協力の事。~~

清峰鋭ごのみ。 2013年8月4日

[清峰鋭ごのみ。](#)

2013年8月4日 [リステラス星圏史略](#) (創作)



マーシャとは口論になる見込みw

雄輝？ 2014年7月8日

[雄輝？](#)

2014年7月8日 [リステラス星圏史略](#) (創作)



一字違いw

<http://76519.diarynote.jp/200707150041350000/>

リステラス星圏史略
古資料ファイル 4-3-3
『皇女戦記』
(地球から異世界へ)

<http://p.booklog.jp/book/102985>

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/102985>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/102985>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ